

翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (九)

清田 啓子

凡例

一、「駒澤短期大学研究紀要」第十二号に、「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (八)」を載せ、数年間休止していたが、今回、その続きとして、寛政十二年刊「錢鑑貨写画」・享和二年刊「養得笈名鳥函会」及び同年刊「初老了簡年題記」をとりあげた。

一、底本には、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（「名鳥函会」）、同東京誌料蔵本（「錢鑑」「年題記」）を用い、「錢鑑」は国会図書館蔵本により、また「名鳥函会」と「年題記」とは国文学研究資料館にある西尾市立図書館岩瀬文庫蔵本の写真によって校合した。

一、黄表紙の性格上、絵組が重要であるので、複製のかたちで、各丁見開きの面を一枚の写真とし、丁付により「一ウ」「二オ」のように示した。なお、この写真は、中央図書館蔵本を手控え用として撮影させていただいたもので、同館の許可を得て掲載した。

一、本文翻刻は、やはり「一ウ」「二オ」のように冠して、写真を対応させた。丁移りは「」で示したが、書入れについては丁付にこだわらなかった。

一、上記の一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ、「五ウ」「六オ」というふうに分離した。

一、翻刻については次の方針によった。

- 1 原文はできる限りそのままとする。かなづかい、あて字、おどり字、濁点等は改めなかった。
 - 2 漢字・仮名とも、異体・略体字は、現在通用の字に改めた。
 - 3 読みやすくするため、句読点は補った。
 - 4 スペースの関係上、漢字におきかえた所もある。その場合、もとの仮名をルビに移した。
 - 5 原文の振り仮名は、右と区別するために、() に入れた。ただし、序文等仮名つきの部分は、一々() をつけず、その旨をその箇所ごとに断った。
 - 6 書入れは、本文のあとへ一段下げて付け足し、大体、右から左へ、上段から下段へという順で並べた。
 - 7 脱字と思われるものはへゝ内に補い、衍字と思われるものは() に入れた。
 - 8 判読しにくい箇所も数多くあったが、読みとれた形に一応おきかえて、大方の御示教を仰ぎ待つこととした。
- 都立中央図書館、国会図書館、国文学研究資料館、西尾市立図書館の御好意に感謝いたします。

付記

寛政十二年刊の黄表紙のうち、「風見艸婦女節用」「譬諭義理与禪禪」「備前播鉢一代記」の三作は、林美一氏『馬琴好色黄表紙集』に収められており、このシリーズには省かせていただけをありがたく思う。同年刊「視薬霞報条」は、文字の不鮮明を解消できなかったもので、次回に送ることとし、享和二年の諸作にいよいよとりかかることができた。周知のように、享和元年刊の黄表紙は、板坂則子氏と岩田秀行氏（「敵対蚤取眼」）とによって、解題・注釈付きで翻刻が完了している。お二方の御労作を励みとして、文化三年のゴールまで早くたどりつきたいと念じている。

ぜにかみみたからのうつつしゑ
錢鑒貨寫畫

〔表紙見返〕

曲亭稗史

飯臺曲亭馬琴先醒。姓滝氏。名解。字瑣吉。性好藉戲謔之言。每作稗史以警悟當世。是以雖兔園冊子。亦有深意之存焉。真可謂滑稽之雄也。先生嘗言。趙再白詩云。名士本來如画餅。古人原不好真韻。先生之於小説。皆根于此。予每歲請于先生而雕刊其所著允賜顧君子認印号為記。冀不至悞。

江戸膏坊翠橋仙鶴堂老舖小林喜衛謹白印

〔一才〕

新鐫 稗史 錢鑑 貨寫畫

寛政庚申靈晨發行

馬琴作



月痕磨ミ出テ照ラス生前一 非ス足ニ非ス跛ニ驅ニ市廓一 請見ヨ

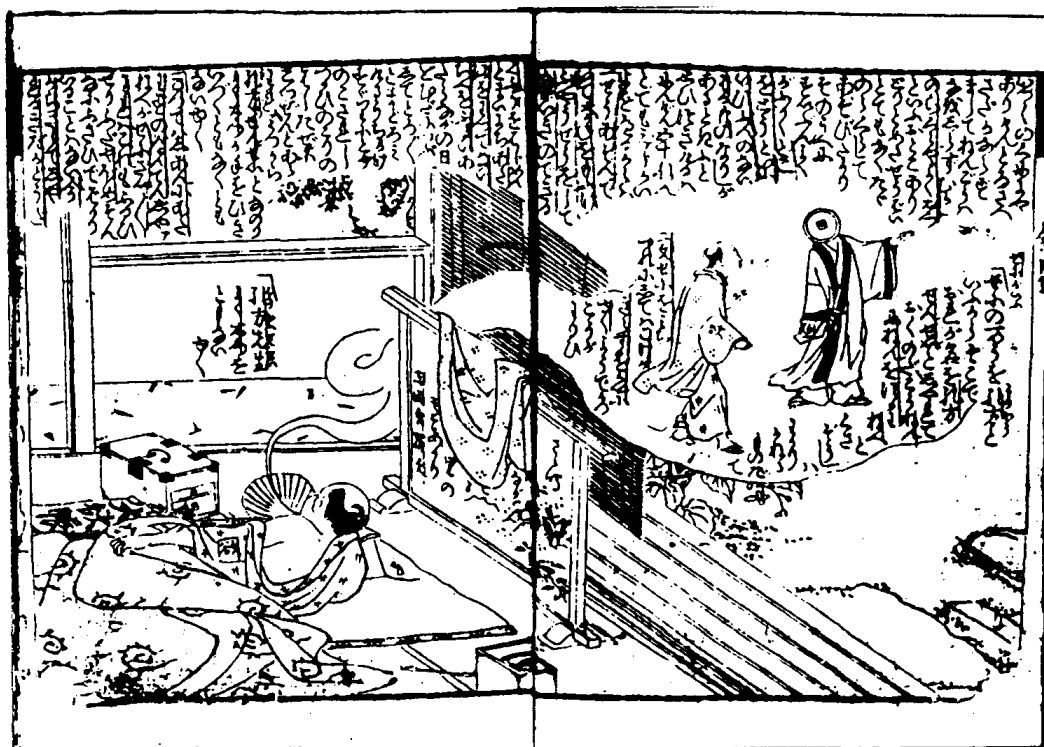
真如深ク貶ス悪ヲ 人間誰カ弄ス隻神銭

京山陳人題

(「ウー」二オ)

いつくの国にやありけん、所さへ定ならず、まして年号はなを知らず。むかしのらくら屋よく右エ門といふ男あり。とりとめた商売とてもなく、たゞのらくらして遊びたがり、其上に随分欲深く、どこをどうといふ言分のない馬鹿者なりしが、或時ふと思ひ付けるは、人間五十年とても短い世を経るからは、一生遊んで大金を儲け、不養生をして長生のできる」工夫を始んと、毎日頭をわつて無い知恵をふるい、あたら長の日をむだに潰してとろくとまどろみけるうち、懸硯に取残されし遣ひ残りの端銭忽然と現れ、自ら孔方先生となのり、よく右エ門が手をひき、いづくともなく伴いゆく。
へこつては思案に値ずの弁天じやアねへが、せにぎいくわ

(「ウー」二オ)



これは、これも古いせりふだ、やぼめ、そんなに塞でばかりい
ることはない。今からさしでしやれる気だがどうだ。

ぜにがいふへぜにの一名を孔方といふから、そこでおれが
名を孔方先生としやれておくのだ。こう念に念を使ねへと、
草双紙はわかりかねるものだて。

へ二文ぜにを道連にしては、痴がきらずを買いにゆくよう
で格好が悪ひ。

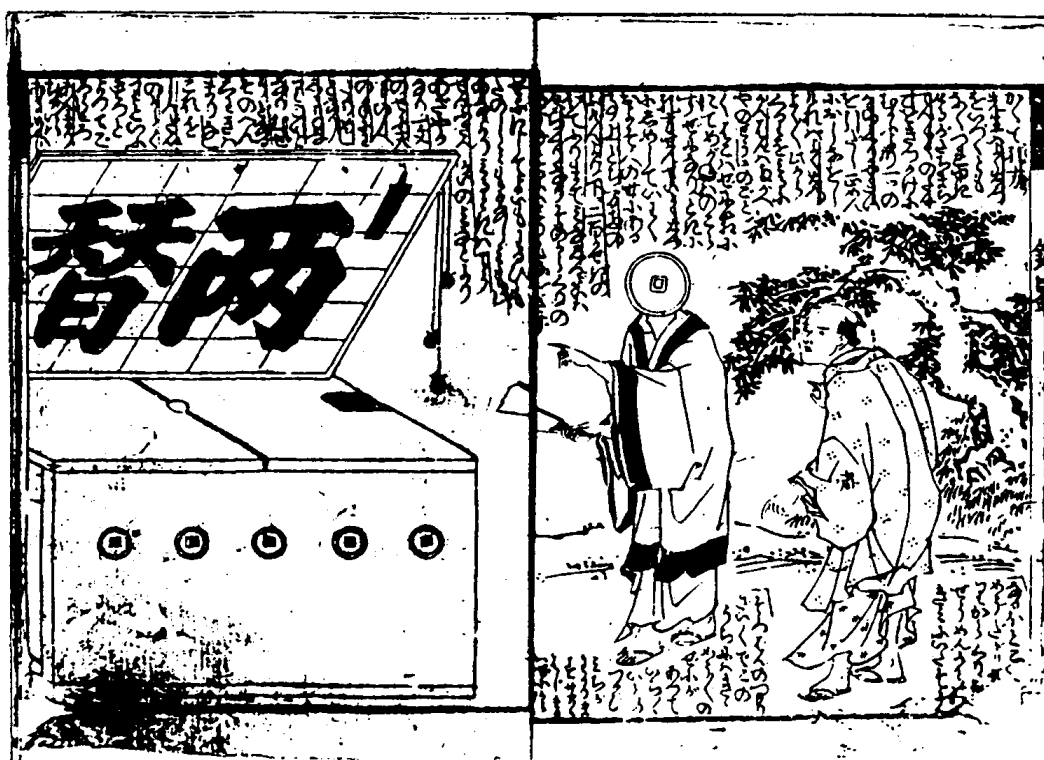
へ孔方先生よく右エ門をともないゆく。

〔衝立の句〕さ、鳴や」日ながの里の雪あかり 東岡舎羅文

(二ウー三オ)

かくて孔方先生は欲右エ門をいづくともなく連行きけるが、
忽ちてんくくの太鼓をきつけに、向ふより一ツのからく
り屋台を引だし、正面に押直しければ、よく右エ門よくく此
からくりをみるに、看板は両がへやの障子のごとく、箱はぜに
箱に似て眼鏡は残ず銭なり。時に孔方先生よく右エ門に示して

(二ウー三オ)

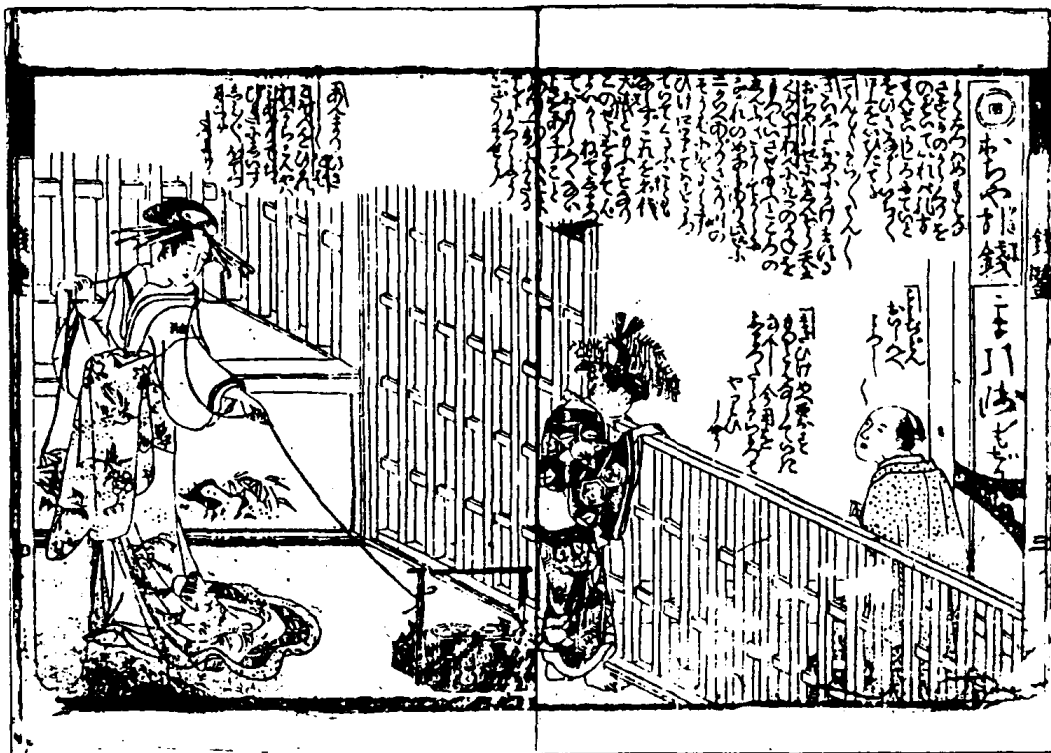


いわく、およそ人の世にある事、上十千万両の分限より下モ二
 百稼ぎの棒天振まで、みな身代は機関なり。そのからくりの眼
 鏡といふはとりもなをさず」銭にして、よいもわるひも楽みも
 悲みも此あなより見るときは、朝鮮釜山海の港よりあざやかな
 り。一文のぜに天下の人の手にわたり、飯となり汁となり、恋
 となり無常となる、その変化極りなし。これを身代のからくり
 といふ。ずつと寄つてごろうじろ、あんまり違はあるめへ。
 へなるほとこいつはめうだ。ドリヤあさりからくりを正面
 からむきみにいたそう。
 へそろばんのつもりざいくで、この中には奇奇妙妙の銭が
 あつて、いちく糸の遣ひ道がわかります。サアく始り
 は、ぜにからく。

(三ウー四オ)

おちや引銭

よく右エ門は目も離ずかのからくりを覗いていれば、孔方先



(三ウー四オ)

生後せいこうにて糸いとを引きながらいちく口上くちがしを言立いひたてる。

へてんくからくへてんく

へ最初さいしよおめにかけまするおちや引ぜには、しんぞう天王てんわう苦く界十年かいねんに九つのかねをもつていさせ給ふところのしんふさにして、裏うらに流れの目波めなみあり、此こゝに二階にかいへ上あがりさがり時の相そう場ばに係かゝらず引ひけ四つまでは坐すわつていて狂くるふこともならず。これ（めうたいたいせん）を名代大銭めいだいだいせんともふすなり。このぜにをもてば宵よいからねてしまつて、面白おもしろくない夜よを明あかすことあり。値あたは二朱にしゆより一歩にかぎる。ナントうつくしうござりませう。

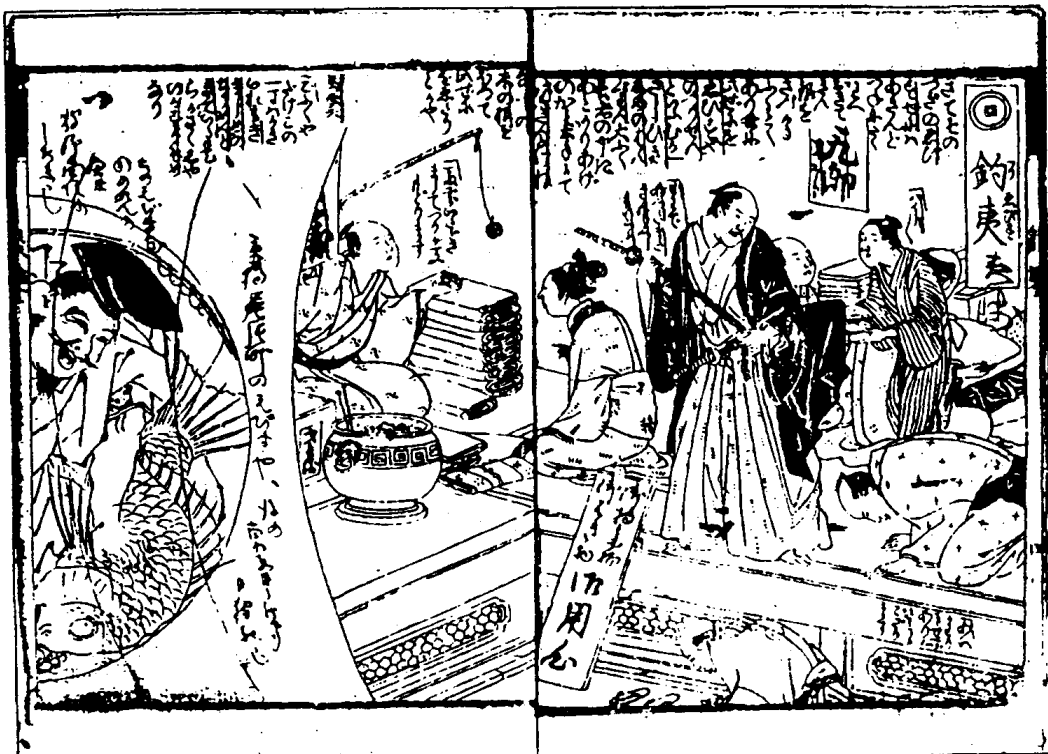
へあんまり久ひさしく煙草盆たばこぼんをひかれねへから今夜こんやは身揚みあがりでぢびきにしいす。しみぐほてつぱらがたつよウ。

へもみぢどん、おいらんへよろしく。

へまだ引前ひきめへでおす。もつと話はなしていきなんし。今用いまようをしまつたらからかつてやりひしやう。

〔四ウー五オ〕

釣夷つりあひす



〔四ウー五オ〕

さてその次のゑびすぜには、商人常に蓄へおきて、金銀を授かる福徳あり。世に此ぜにをゑびすやの釣銭といふ。昔さしひきしめの判官大ふく長者の邸あと、かりあげのかみの土手にて、現金きんかけね」なしの木の根をほつて此ぜにをゑたりとかや。

ハイ

あいかわりませず有難うござります。

世話であつた。また近日まいらふ。

一両二分いたゞきまして、つりが一文もどります。

馬琴云へ「ごふくやだけこの一丁は書入もきまじめの縮緬ときている。是らが作者のかすりぞめなり。」

(五ウ)

大欲銭

大よくぜにをまつる人は十二文のお神酒、五文の供へ、七文の七いろ菓子、僅廿四文のものをそなへて、わたくしには千両お授け下されのイヤ、長者になされてくだされとのこと、有りたけの欲心を並べ立、願へども、それは一まいの札をかつて百両の

大欲銭 大いふ



忠臣水滸傳前編 全部五巻 未春かよ木

同後編 全部五巻 未春かよ木

尊氏勤徳記 全五冊 柳二代軍記 全三冊

役者名所圖會

富を取んとするよりもおよばぬ事なり。よつてこれを大よくぜ
 にといふなり。たゞ心に明暮上見ぬ頭巾をかぶせ、出る杭打る、
 の才槌をかへりみ、ふくろに身代の出入を考へ、足をすりこ木
 にしてかけまはらねば米の飯はくへめたわらなりと思ひこんで
 かせぐときは、大よく変じて大こく上々吉の金持となること疑
 いなし。

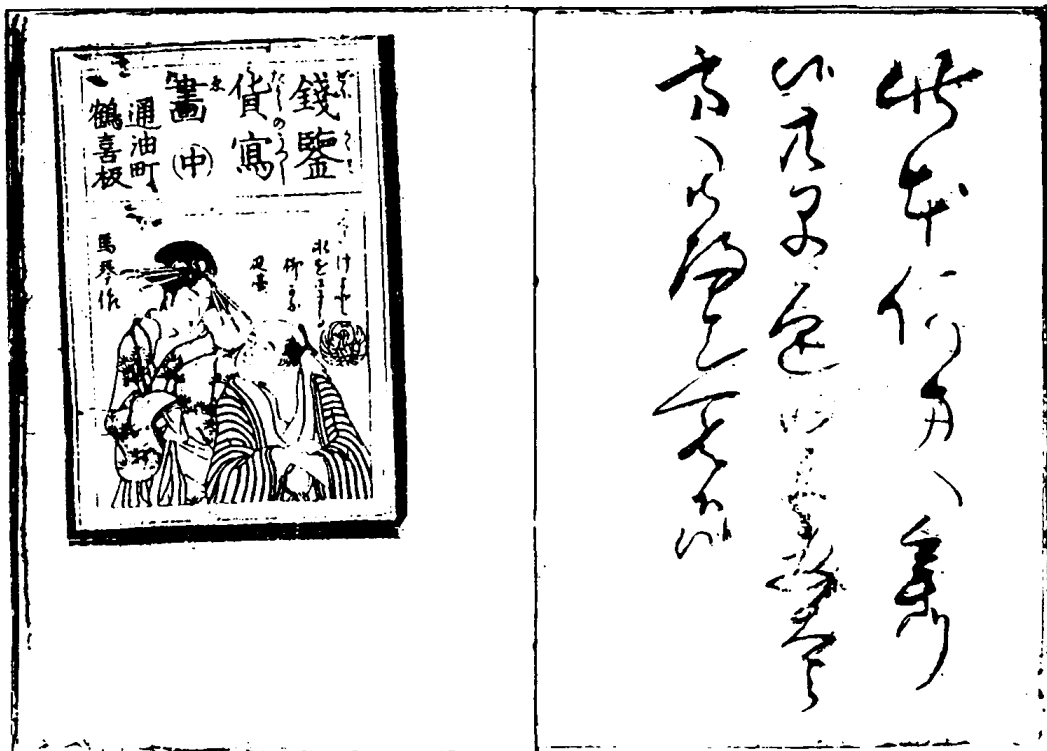
へうぬらはしやりくいふ米の飯をくらいながら、くろご
 めめしで馳走振りが氣にくわぬ。願うことに事をかいて、千
 両の百両のと、ばかくしい。ゑびす講の売買じやアあるめ
 へし。

へどふぞ千両おさづけくださりまし。まづ当分百両でもま
 にあいます。なにぶんおねがい申ます。

(六オ)

鍋銭

なべせんは三月から三月まで、一両二分ぐらいよりだん



くあり。ぜにの面おもてに山だし不調法ふてうほうのもじ見ゆる。此ぜに
 荒神様くわうじんさまのお賽銭さいせんに上るときは、かまど流元ながしもとのまつりがよくな
 る。はじめはその色いろなべの如ごとく黒し。次第しだいに水道すいどうの水がしみて
 くるに従したがつて使い難つかくなるぜになり。もしかねの性せうがわるけれ
 ば、さしのしりのはやいが傷きずになる。よく氣きを付つけてつかふべし。
 へ小づかひぜにから櫛くしかんざし、わたしやおまへに使つかひ込
 まれ、給金きうきんの金氣かなけまでさつぱりぬけてしもふたわいなア。
 へなべ手前てめへぐちになつた。
 へちんくかものいりとり鍋なべ、互たがいの尻しりが割鍋われなべになつたら、
 まよ、とちぶたにして逃にげるとも、てなべさげても夫婦ふうふのく
 ち、なべくいかねてよいものか。

(六ウー七オ)

車念佛(くるまねぶつ)

如是我聞(によせがもん)、地ちごくの沙汰さたも金次第かねしだい、阿弥陀あみだの光ひかりも錢程せにほどの譬たとへに等
 しく、念仏錢ねんぶつぜにのありがたさは、回まわりのよい事こと百万遍べんの数珠じゆずより
 速はやく、先祖せんぞを粗末そまつにせぬ人ひとは此こせにを授さづかる事ことあり、此座こゝの緞さし

(六オ)



に連るもの、音頭取の坊さんは二百のお布施をたき出し、隣
 の婆さんお爺さんぼた餅の馳走にありつく口果報まで、みな念
 仏銭の「お陰なり。されば朝夕心の鍵へこの銭をく、りつけて、
 なむあみだぶつと唱るときは、悪念の屋尻をきられず、また煩
 悩の犬にくひつかれず、老若男女貯へおけば一生徳ある宝な
 り。

「こんにちのお心ざし銭と代もつ一切の諸鳥目なむあみ
 だぶつ〜。」

ア、ちと腹が黄粉餅た。こうもあるうかへはらねぶつ百
 万べんのじゆずとともにくつてしまひし煩惱ぼたもち。

「きなこのぼたもち、塩がたんとでからいだ〜〜〜。」
 「ナニヨウいわつしやる。」

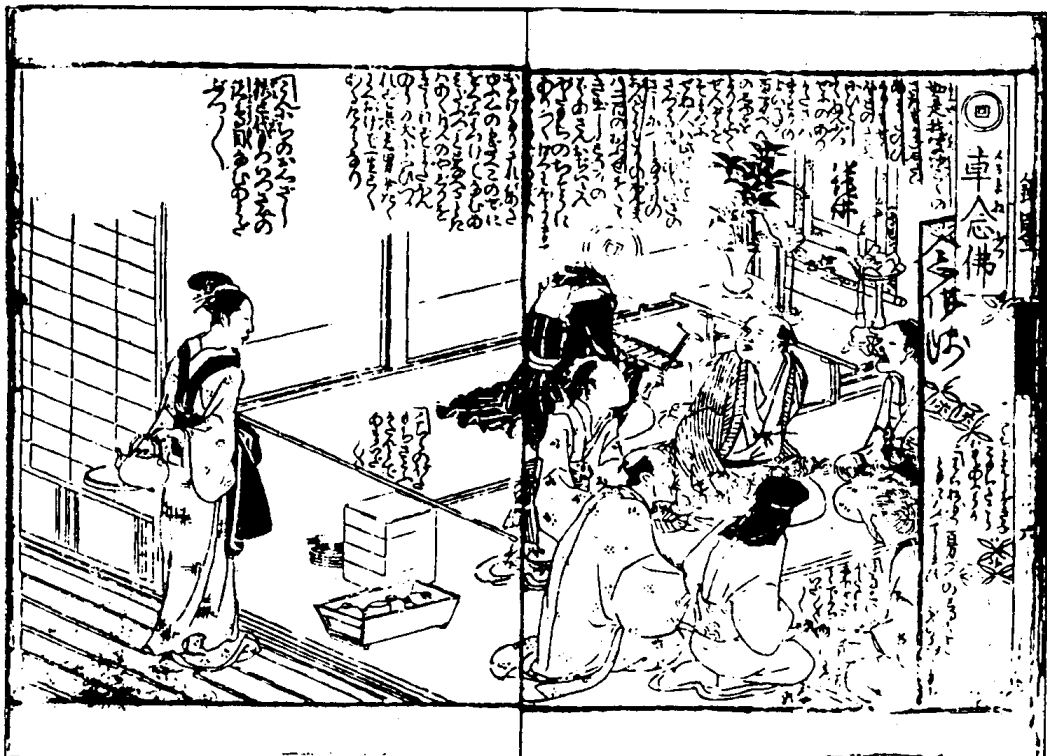
「こちらのぼたもち砂糖がたんとであまいだ〜。」

(七ウー八オ)

酔樂通宝

よいらくつうほうは俗にいふあと引銭なり。銭の形がとが立て

(六ウー七オ)



裏に太平らくの三字あり。かりそめにも此ぜにを手に触、ば氣狂のごとくになり、或は目眩立ぐらみの病起り、家のうち廻燈籠のごとく見へ、甚だしきに至ては一足もありくことならず、口より小間物店をいだせども犬よりほかにかい人なく、いくらかせいでも宵越の「ぜにをもつことならず。されども此ぜに持人の心によつて少しづ、蓄へおきて、をりくだしてたのしめば長命のさいわいありて、しごくめでたきたからなり。

へこのおとこは可惜ぜにをみんな小間物にしてしまった。

へ酒もいろくのんでみたが、池田のへほどよいさけはあるめへ。まづだいに火がいらす、色がしろく口あたりがよく、いつ迄おいてもわるくならぬことが妙だ。それだからコウ酔たのだがどうしたのだ。中腹じやあねへが、野郎のほら貝たと思つてな、ぶうくをいわせちやあ大みね山上の」先達より音がするのだけは。ブウくく。

〔八ウー九オ〕

おいらんだ銭



〔七ウー八オ〕

おいらんだぜには傾城^(けいせい)天王女郎五年はじめてこの国^(くに)へ渡^(わた)るところなり。銭^(ぜに)の形角^(かたちかど)とれて甚^(はなは)だ丸^(まる)し。値^(あた)三分よりだんくありといへども、始終^(しじうて)手に入^(いれ)んとするときは百両千両さらにかぎりなし。はじめて此^(こ)ぜにを手に入^(いれ)る人、心たちまちのろくなり、氣ばかり俄^(にわか)に大きくなりて銭^(ぜに)金をなんとも思わず、凡^(まづ)そおいらんだぜにのふしぎわ、ぜにのあなへものを投入^(なげ)る、時は、十間^(けん)口の家蔵^(いへくら)といへどもづぶくとはいる事「こうじ町の井戸より深く、始終^(しじう)借金^(しゃっぴん)のふちへはまる水難^(なん)あり。恐^(おそ)れても恐^(おそ)るべきものはたゞ此^(こ)ぜに也。

へぬしやアこれぎりで来^(き)なんせんと、一文のつらよごしでおつす。

へモシはばかりながら此^(こ)ふみを金^(かね)さんに届^(とど)けて、そしてあつちからくる文^(かみ)と両^(りやう)がへしておくんなんし、など、此^(こ)けいせい今夜は客^(きやく)がないゆへ銭^(ぜに)にならず、素顔^(すがほ)で話^(はな)しにくる。

(屏風の詩) 能於禍処翻為福 解向讐家買得恩 飯顆山人

録



(八ウー九オ)

(九ウートオ)

讀書調宝
(よみかきてうほう)

よみかきてうほう銭はその値一字千金なり。一年三百六十文
怠りなく此ぜにを持通せば、文盲もたちまち目があき、ふで一
ほん紙一まいにて百里千里のさきくまでも通行よく、身の宝
といふは此上になし。ぜに百文五十文の事を百字五十字とかく
事はみなこのぜによりはじまる。

へいにしへの師匠弟子を選んで道を教へ、今のお師匠さんは
ぜにをとつてわざをおしゆる。此ゆへに師匠のおかげで目のあ
く弟子、でしのおかげで飯をくう師匠なれば、こゝは双方五分
くのよふなれ」ど、大根ごぼうを買ふよふに、今といつて今
買れぬものは身の中の芸ばかりなり。その面倒をみてやるうる
さ、は中々勘定づくでなるものではなし。されば師の影は忒
朱のぜに七百かりて踏まずといへり。ナント子供しゆがてんか
く。

へ此せつは線香いつぼんたて、無言の内ゆへ子供の書入な
し。念のため御ことわり申候。

(九ウートオ)



へみな精だしませうぞ、とかく人はよみ書がだい一じや、
 唐の人は寝たうちも読書の事を忘ぬゆへ、かの唐人のねごと
 にも、よみかき算用」とらやア〜といふたものじや。

〔十ウ〕

佛法僧宝

みぢん積て山となり、無心つもつて愛想づかしとなる。ほとけ
 に不可量の利益あればぜに不勘定の利息あり。一丈六尺の
 かなぶつももとは小銭一文の勸化よりくみたて、千両万両の商
 人ももとは灯芯一文よりしだすことあり。されば今もぜにの事
 を大ぶつというべきを、代もつとなへきたるはみな大ぶつ
 誤りなり。

へまことにぜになき衆生はどしがたしだ、これほどの人と
 をりでも、さつぱりぜにならぬ大ぶつときている。

〔十一オ〕

谷斎合宝

〔十ウ〕



なみせん二本紀にいわく、やつさいあいぼう銭は辻駕の王黒
 手山の棒端をほつて酒手三百せんを忍給ふ。此銭をもつときは
 あぐらをかきながら宙をとび、眠りながら家に帰る。すべて足
 に果報あり。世にせにをおあしといふもこのあいぼう銭より始
 まる。

へぼうぐみ、ひつ、こくいふな、だんなは、ぢよせへねへ
 わな。

へヤツサイく。

へちよつと田町の旧林が前、おろしてくだせへ。狂哥の事
 でちつと談じてへ事がある。

(十一ウー十二オ)

木兎銭

づくせんの形み、づくの撞木木に止りたるがごとし。このせに
 青ざしの一本づなをよく渡りて、至て目方の軽いぜになり。綱
 のさしをわたるとき、はり銅くといふ音がする。背の文にだ
 るま大師ざぜんのてい、獅子の洞入洞がへり、さまぐの模様



あり。此ぜに一文をつなのうへに」つるしておけば、十六文廿四文のはしたぜにを引よせ、巾着きんちやくの底そこをはたかせること木兎かぶの小鳥とりをひくがごとし。ゆへに俗ぞくよんでづくせんといふ。ぜにのおもて(かるわざつうほう)は軽業通宝けいぎょうつうほうといふ白抜しろぬきの大文字おほもじあり。もちろん大坂下りの珍ちん銭せんなり。

へなるほどきついものだ、十六文や二十四文は惜おしくないみせものだ。

へつぎは一文じかりばしの渡銭わたしせん、ざるの中へとび入りのはなれわざをお目めにかけます。イヨどつとほめたり。

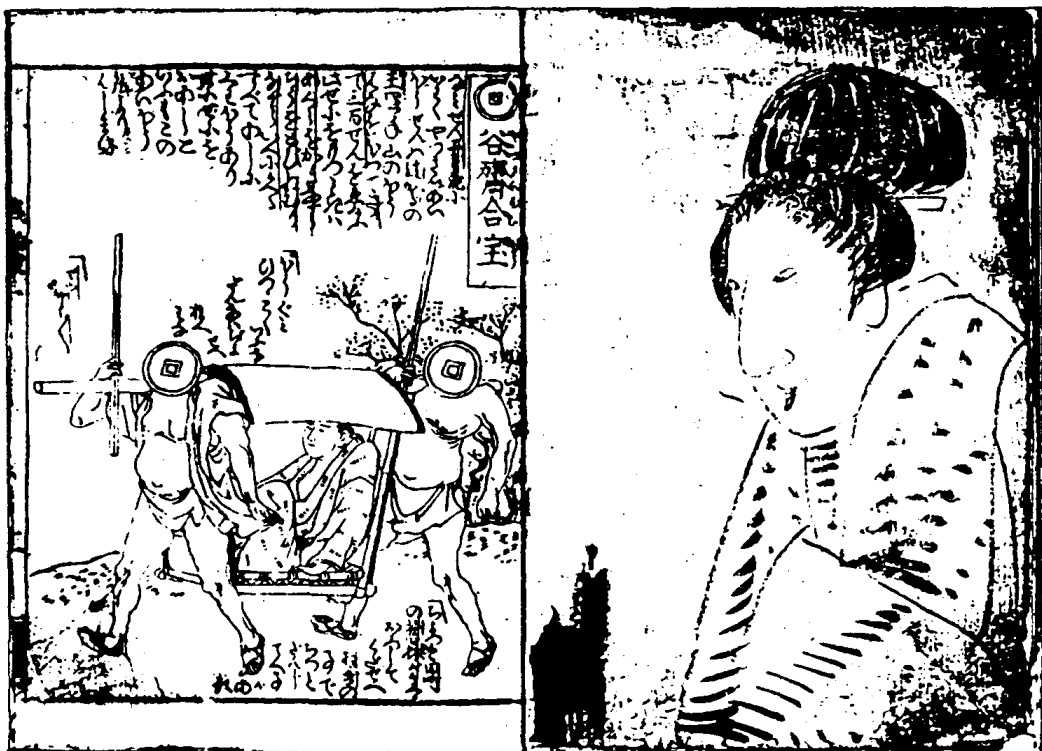
へ銭ぜにに傘からかさをもたせたところは銭傘ぜにがさのとれるようにといふ判はんじ物ものをみるようだ。

〔十二ウー十三オ〕

心中(しんちゅうぜに)銭

しんちゅうぜにはむかし青砥(あせど)左エ門藤綱ふぢつな、滑川なめりの水そこをさぐつてはじめて六文もんをゑたり。その後帯屋長右エ門おびやといふもの此ぜにを手にいれて桂かつらのかわ財布さいふにはまりしより、質屋しちやの蔵くらに埋うづ

〔十一オ〕



れ、遂に八ヶ月ぎりの浮名を流し、果は豊後のくに富本のさとに止り、かぶき山じようり寺の山物となる。

へさやふのなげきもさる事ながら、年はもゆかぬそなたおば、はらんだぜにしたうへは、一文へ言訊た、ず、どのみちひとつぜに箱の、さしで未来へゆこわひのう。

へ長右エ門たん、おあしが痛うなつたわいなア。

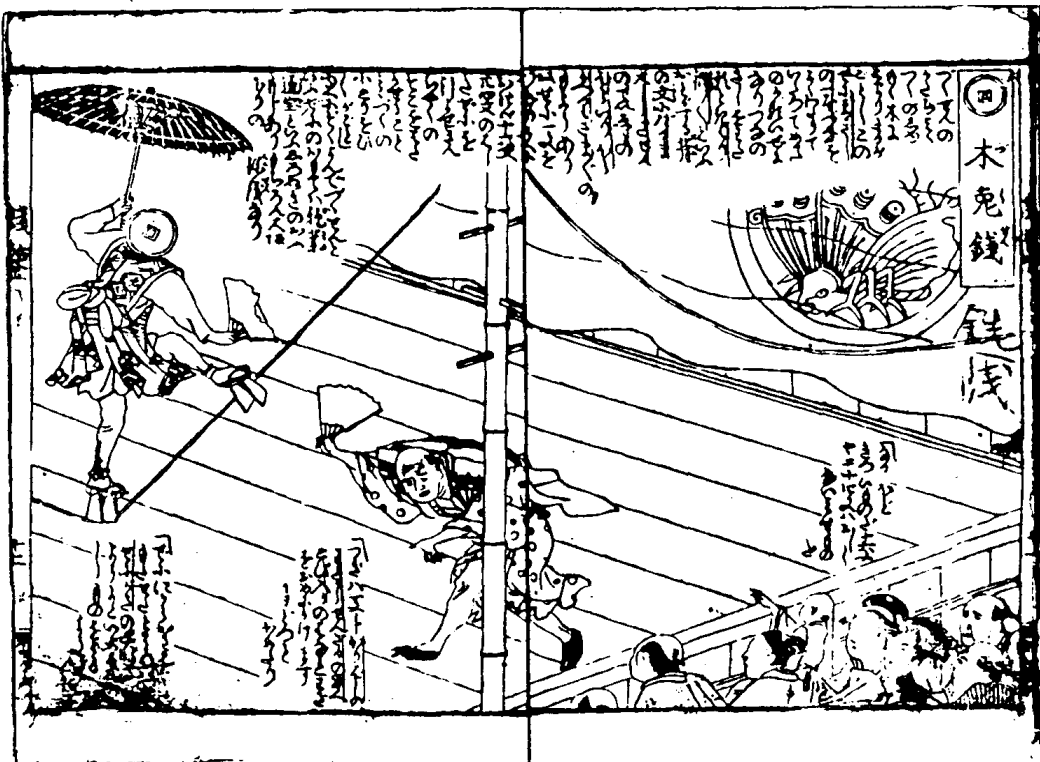
へ物前からつけつになつてまごついても、まだみちゆきのできるうちはたのもしひ。

〔十三ウー十四オ〕

心中せんの上りが打出にて、お名残おしうはござりますれど、銭のかたはおかわりとなりければ、欲右エ門も思ひよらぬ楽しみをしておのが庵へたちかへらんとするを、孔方先生しはしと押しめ、善悪二面の鏡をとり出し、またながくとお談義を説かけるぞ小うるさいことだ。

へそれ鏡の面には万もつを映すといへども人の心はうつしがたし。たゞ善悪邪正をうつすものは銭の鏡にしくはなし。

〔十一ウー十二オ〕



孔子の仁もぜになければ施しがたく、盗跖の悪もぜになければぬすみがたし。只欲の一字をかへりみ、不義のたからを羨まねは、ぜにの鏡に向ても恥しからず。人はみめよりたゞ心じやとかく身の油をしぼつて儲た錢でなければ身につかぬ。なんとがつてんがゆきましたか。」がてんがいつたらこの次をよんでみさつしやい。

へだんくあやまり入りました。もちつとの事でわたしもお前に見放れるところでござりました。こわやのく。

ぜにがいふへこうした所はどうか手の筋でもみてやるやうなれど、ありよふは此かゞみをきさまの「みやげにやるころだ。うしろへ占いの看板をかいてをくは絵組に困て作者の思ひつきた。今のくさぞうしは気をつけてみねへと、大人にもわかりかねるところがあるのさ。

(十四ウ—十五オ)

と思へばたちまち夢覚めて、よく右エ門むつと起き、辺をみるに夢中に授つたる二面の鏡まくらもとにあるもふしぎと手に

(十二ウ—十三オ)



取上れば、欲心たちまちたちさりけるが、諺にも七人の子はなすとも女に心ゆるすなといふごとく、なんぼ夫婦の中でもしれぬものは心なり、此鏡を授りしこそ幸い、か、あ左エ門か心を照しみると、かの鏡をとり出せば、ふしぎなるかな女房の顔さながら縞の財布とみへる。女ぼうの事を妻といひ婦へといふも此いわれなり。

へ女ぼうといふものは勘定なしに欲の深いものだとはかり思っていたが、雑巾の破れにもつぎをあて、乾物の頭も粉にして鯉節の代につかひ、あく「せくして貯たほまち銭も、まはりくては鍋釜の中へ入てしもふことまでも、鮮かによく見へる。これを思へば女ぼうの心は財布の中の銭のごとく、心の紐をしつかりと締て、まめぬす人の用心さへすれば身代の使ひ減はせぬといふことを、たゞ今發明つかまつた。

へガタリく／＼ガタ／＼。おとつさん団十郎く。
へひかれなばあたらせにをもつかふべし財布の紐に心ゆるすな。女のちに会ふ。



〔十三ウー十四オ〕

へモシだんなへ、こういふ見得にならねへと、俊寛鳴物語
 のこじつけらしくみへやすめへ。

見物のいわくへなんぼ気が利ても、さみせんへ蠟燭をのせ
 てさし出しとみせる工夫は、子どもの思ひつきとはみへぬ。

大かた作者の入知恵であんべい。

へさいふを逆にすれば婦妻になる。こいつはおもしろたぬ
 きた。

〔十五ウ〕

右にのべたる錢鏡の趣は、ちかく仏の方便にもとづき、凡夫
 貧欲の迷より家を失い見を亡す事みなこのせにのちおもてにうつ
 るがごとし。死ぬべき人の命をも助け、生くべき人の命を失ふ
 もみな錢金の欲なれば、これほど大せつなるものはなし。かり
 そめに下人はしたを使ふさへ、使ひ様あしければ恨み憤りて主
 人のいへを立去るものなり、いわんや錢金を我ま、につかひ散
 せば、ぜにかねもまた恨み腹立て、一日もその家に足をとどめ

〔十四ウ—十五オ〕



ず。人の身代はみな銭にて組立しものなれば、此ぜに塔の絵馬のごとし、すこしにても銭に憎るれば、天が下の住いならず、めいゝずいぶん身を粉に碎き、身代のぜにとうを失わぬ御用心く。

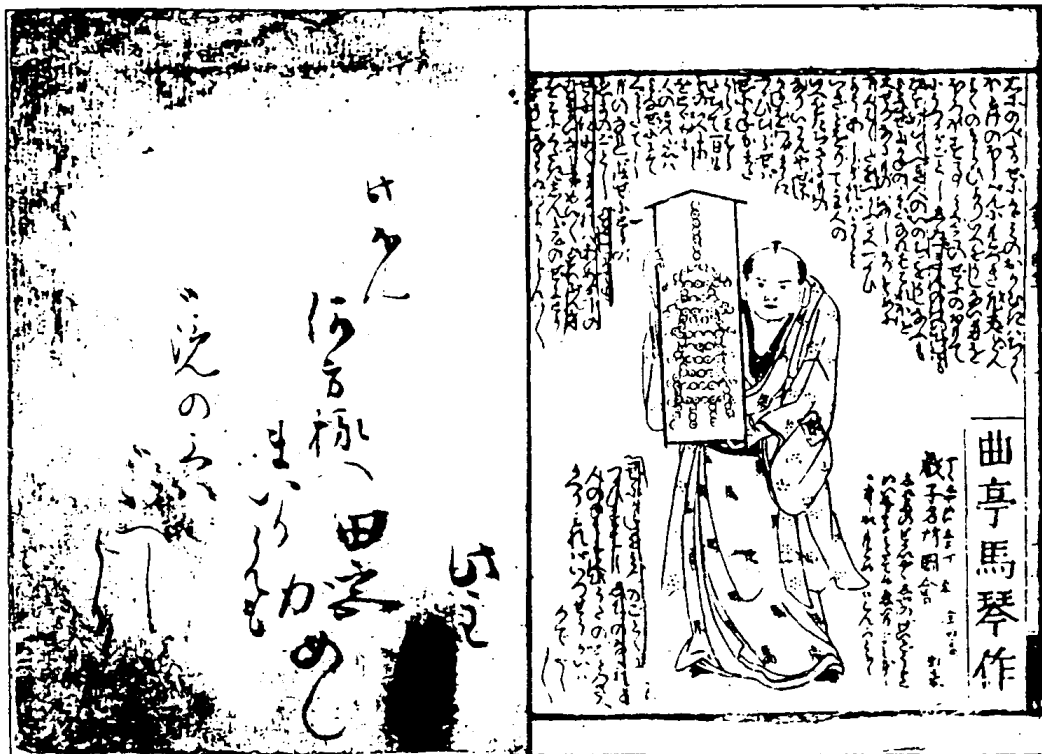
へぜにかねを水のごとくにつかひすてし質の流と人のゆくすへ。此うたの意さへかへりみれば、一生涯はめでたしく。

曲亭馬琴作

戲子名所図会

芝居の世界役者の芸道を名所にみたて候。絵入よみ本に御座候。御求め御覧可被下候。

〔十五ウ〕



養得笥名鳥図会

(二才)

(振り仮名は原文のまま)

花に百花の香ありて同じからず。鳥に百鳥の声ありて百鳥異なり。むかし雪山の寒鳥無常を觀じ。恒山の四鳥別離を悲しむ。籥嘖暗として公治長と語り。鶴瓢々として林和靖を導く。蘇武が鴻雁狄地の苦話を訴へ。崇義が鸚鵡渾家の妍通を告。貞婦化して鴛鴦の衾寒く。実方没して雀形の屏風破たり。梧に鳳凰。柳に燕。梅に鶯。葛籠に連雀。鴟の履價は杜鵑にはたられ。鶇の鮓は。信天翁にしてやられ。夫芦に集く鳧。蓋となるをおもはず。麦に鳴鶴。灸となるをしらずといへども。雨の濡鷺。頼風の義絶を哀れみ。夜の群衛。祐成の登樓を粧ふ。蓋人に鳩胸ありといへども。三枝の「二ウ」札に疎く。草に烏瓜あれども奚ぞ反哺の孝を知らん。神代の無名の雉。仏説の金翅鳥動迷ば明巢の白日鳶。悟れば高野の仏法僧。繡眼の不動。鷺の宮。

(二才)



花に百花の香ありて同じからず。鳥に百鳥の声ありて百鳥異なり。むかし雪山の寒鳥無常を觀じ。恒山の四鳥別離を悲しむ。籥嘖暗として公治長と語り。鶴瓢々として林和靖を導く。蘇武が鴻雁狄地の苦話を訴へ。崇義が鸚鵡渾家の妍通を告。貞婦化して鴛鴦の衾寒く。実方没して雀形の屏風破たり。梧に鳳凰。柳に燕。梅に鶯。葛籠に連雀。鴟の履價は杜鵑にはたられ。鶇の鮓は。信天翁にしてやられ。夫芦に集く鳧。蓋となるをおもはず。麦に鳴鶴。灸となるをしらずといへども。雨の濡鷺。頼風の義絶を哀れみ。夜の群衛。祐成の登樓を粧ふ。蓋人に鳩胸ありといへども。三枝の「二ウ」札に疎く。草に烏瓜あれども奚ぞ反哺の孝を知らん。神代の無名の雉。仏説の金翅鳥動迷ば明巢の白日鳶。悟れば高野の仏法僧。繡眼の不動。鷺の宮。

凡夫の智慧の鳥の迹。一罇の喜怒哀楽。一切衆生花に鳥。羽根が敵の世の中じやな嗚呼。

享和二年壬戌上春

曲亭子誌

(二ウー一オ)

ここに都烏丸辺に名鳥屋づゑ蔵といふものあり。その身鳥羽の里にて生れ、朱雀にて人と成り、今烏丸に世帯をもち、家名も名鳥やといへば始終鳥にのゑるにつけ、づゑ蔵つくづく思ひけるは、江戸にて孔雀の屋など、ていろくめづらしき鳥をみせて茶を商ふ店ありと聞ば、何ぞ珍しき鳥を見せて、しこたまこだんと金もふけをせんと工夫しけるが、所詮あきすぎたるよの中なれば、ありふれたる名鳥では、さのみやんやともいふべからず、たとへ趣向は古くとも、代物を新しくして一番落を取ると、先一軒の酒店を出し、花鳥茶屋ととんだ靈宝のひ間をこぢつけたる種々の名鳥をみせければ、一合の酒を売ていろくの見せ物を見ること故、これは安いものなりと、だんくんと評判高く、づゑ蔵しこたま金もうけをする。

(二ウー一オ)



へなるほど安いものだ。十六文が酒を買ば、目と口に楽みをさせる。とかく当世は鼻紙入やで小菊まで売る位にせねば、おちはきませぬ。

へ酒をのんでは早口鳥がみたいね。

へこれが評判の名鳥酒屋かの。

(看板) 都名鳥酒店

お鳥さかなしなく 名鳥屋凶会蔵

(二ウー三オ)

先づ最初におめにかけてまするふくらむすめは算盤にて押へたるなやにべ山の名鳥なり。額は鶏のとさかより出張り、頬は赤くして燕のごとし。またぐらにちとくさみあり。なく声べつちやくちやべつちやこちやとして、雄鳥を一疋みつけると直に囀り出し、折く父無子の玉子をはらむ。此鳥二三十年を経ても丸くなる。これをふとつ鳥と名づく。毛の色たて白に巻たる菰の如く変じ、歩くなりはおひるの横飛に似たり。とかく亭主鳥を尻にしきたがり、ゑて雌鳥が時をつくりたがる。とんと白

(二ウー三オ)



い齒は見せられぬ名鳥なり。

○さてその次のおふくろうは欲心熊鷹の爪に似て、昼はしよぼくと目がみへず、夜は持仏のはなにとまり、ぼく／＼／＼なんまいだあぶと囀り出せども、一体が寒がり坊なれば、こたつあんくわのたどんを餌食とし、夜が明たら罪つくろう／＼と鳴くと申す。よめ鳥むこ鳥などいふ若鳥をおふくろうと一つ庭籠におけば、とかくつ、き散して仲が悪し。それにつけてもただ謹むべきはおふくろうさまの心なり。

〔ふとつ鳥〕

へおいらは尻に店請がいる代りには、強儀に暖かだ。寒の内卵酒をのんで寝るよりも、ふとつてうは暖り薬だとさ。

〔ふくらむすめ〕

へとびつくらなら負やあしねへ、湯文字が引裂てもいゝのさ。

へさけをとつて鳥をみせらるゝは、酒をかつてしりを切れるより割が安うござりませう。

おふくろういほくへよがあげたら罪つくろなんまいだ よがあげたらつみつくろふなんまいだ。

〔おふくろう〕

〔三ウー四オ〕

おいらんだわたりのきやく鳥は常に富の山に棲み、なく声鶯の如く、頭の毛色くろく、黄なる鼈甲のさしげありて百文がくこの油の匂たかく、顔は桜色にして下村の翁糖をあざむく。肌は水晶のごとく透通り、総身孔雀に似たり。此とり八朔一日は毛色雪よりも白くなり、傾城天王苦界十年初て此土に渡り、流の淵に舞遊ふ。水鳥ゆへ夜起てゐることは

何とも思はず、この鳥心に悲みなくして空泣をすることあり。な
 けは忽ちおん」どりがのろくなる。第一の奇妙は毎晩三分づ、
 の糞をする鳥なり。此きやく鳥につがひたがる鳥いろくある
 うちに、やぼといふ鳥は鳥のうちでもすけ平鳥にて、さすがの
 きやく鳥にも嫌がられてから、宵から腹を立ち、あのめんどり
 は取替こう、見立直してとつけいこうにせうなど、やぼな音を
 だして、帰るくといふ中、忽ち野郎の玉子の如く丸められ、
 ついそれなりにのろくなる。是をひまつくりのやぼ一トつがひ
 とはもふすなり。

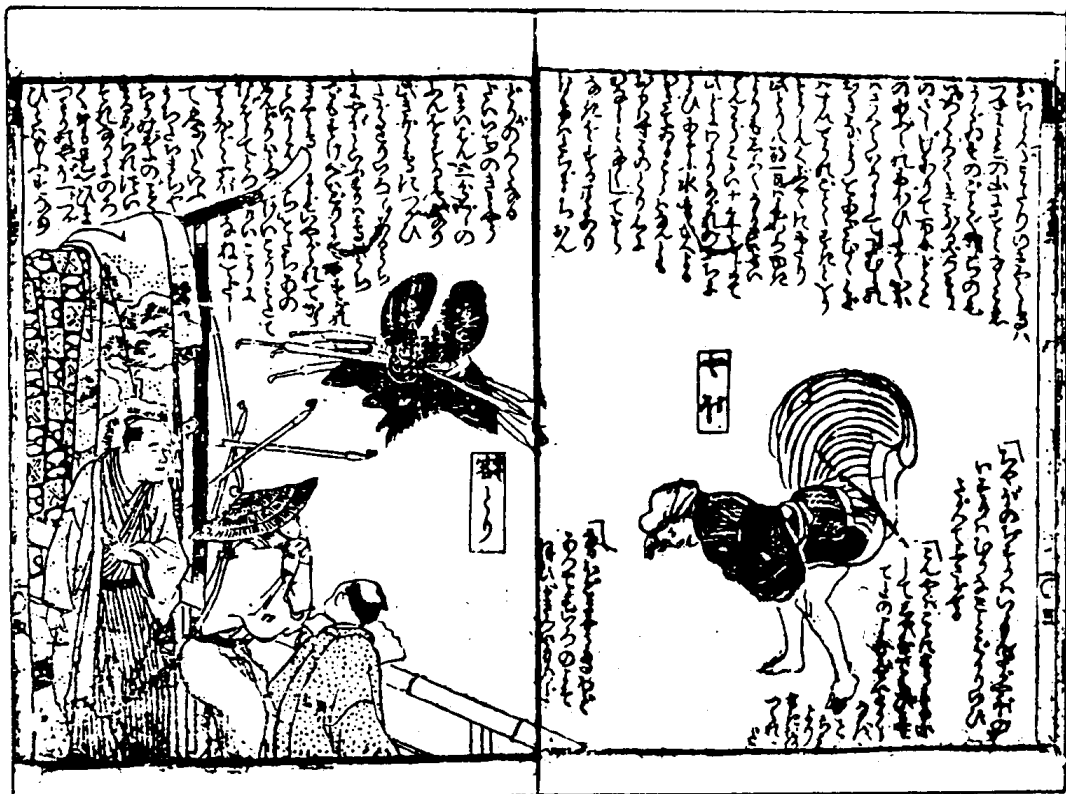
へちやぼのぢすりはい、もんだが、やぼの強請はむりなこ
 とばかり言ひたがつて、ふさがせる。
 へ今夜はこ、にとうまるにして、三味でも弾せて楽しむべい。
 とかく名を取うよりときをつくれだ。

〔やぼ〕

〔客とり〕

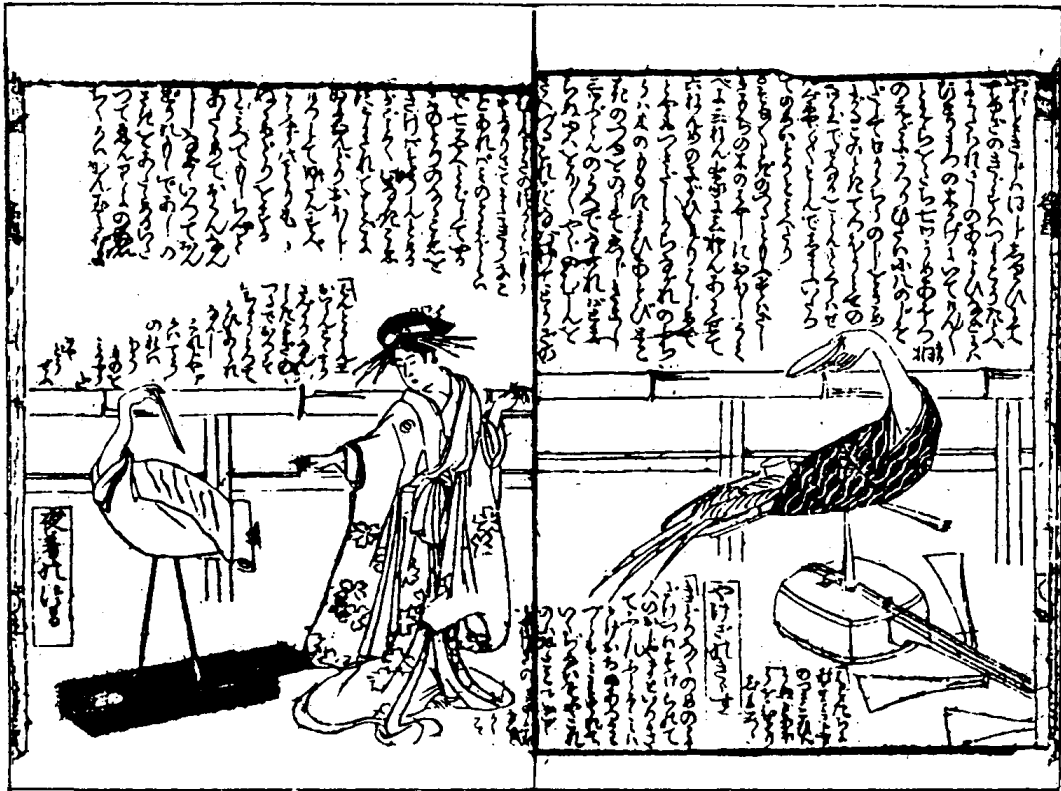
へなるほど客鳥ほどあつて毛色の装ひがきついもんだ。

〔三ウー四オ〕



やばときじは同じ種類にて、やけぎの雉は妻恋うたとへに謳
 れ、差のある宵などにはひとり松の木陰にいて、けんくとえ
 らを立ち、七ツ梅梧つ桐の枝にうつり、額に八の字をきめたが
 る。この時鉄砲店の一ツ玉で背中をどんと食せは、ぐにや
 くくと死でしまふ。至てのろい鳥をみへたり。

○そもく夜着の鶴と申すは座敷持の木の林に多し。海辺に三
 年山家に三年合て六年めの子飼より始て、とやにつきだしから
 流の淵うは木の森に舞遊び、とこ花の露を飲て餌食とし、三ツ
 ぶとんの上でなければとまらぬゆへ、折く夜具の無心を囀る。
 これを名付て当座の「無心夜着の鶴とはもうすなり。さてまた
 急な事あれば、みの皮を剥で七ツやへとばしてやる。この鳥の
 なく声を聞ば総身融るが如く、此なき声に浮されて、はごにか、
 る雄鳥おほし。決して油断すべからず。此鳥もぬくめどりをす
 ると見て、もしちつとあた、めておくんなんしなど、言つて、
 雄鳥の股で足の先をあた、める。至て遠慮のないち、ないかん
 玉子なり。



〔腹立にあたるきゞすの妻恋はうぬが阿呆をひとりしれつ、

〔やけぎのきゞす〕

へきどりなくのめの樽酒つい助けて 人のおじやまといつかさて ふられふらるゝ身はかけおちの 厚皮面も見忘
れて いくぢないそやこれのふおとこ下略 やけぎのきゞすなき声かくの如し。

へ番頭さんエ、おいらんこ、より授りなんした夜着の鶴でおつす。ちかう寄てかひあられなんし。これじやア開帳
の靈宝物をみるやうだ。ヲヤどうせふ。

〔夜着のつる〕

〔五ウ〕

あびるといふ鳥は湯殿山行水寺の池にすむ。この鳥を好む人は昼のうちぬかるみ溝の中をほづき歩くといへども、夕
かたに至て自ら汗を流し、垢を落とし、みの内さはくと涼くなる。傾城厄になる時は此とりをかふて垢を落とす。これを
あびるの行水といふ。

〔あびるの玉子〕

へかたから熱くて入られねへ。たといくはあついのうらよ、だ。

へぎやう水の水濁はもつて足を洗ふべし。決して顔は洗ふべからず、だ。

へあびろか、どのく、あひるか、と、きこへればい、が、心もとねへ。

〔六オ〕

やば鳥といふ鳥は鳩や鶏のごとく宮地くく多くゐるなり。
 此とりを入れる籠は葎箆張にて細ら長し。なく声どんがつきり、
 ちん。からりん、となく。とばの院揚弓元年初てこの国へ渡り
 しと、言伝ふ。この鳥娘の如くをりく襟へ矢射付らるゝこ
 とあり。これを匣にすればよく諸鳥夥し。四十からははごに
 かゝらず。

〔矢場鳥〕

へへたがきてをりく天井へとばせられるには困る。
 へどん。かつきり。ちん。からりん。どん。イヨあたりま
 す。この書入は版元が喜ぶだろう。

〔六ウー七オ〕

やもめはかもめのこじつけ也。此とり夜になれば独床の海に
 なき、四十女の年波にもまれ、顔に小皺よりて焼蕈に霜のふり
 たるが如く、女護の嶋の南風にふかれる時は心持を味にする鳥
 なり。朝は夜明から目を覚し、おさんや起きよ。長松やおきよ

〔五ウ〕〔六オ〕



くとなきわたる。芝居の鷗しばゐはとひよくとなけど、このやもめはおきよくとなく。こゝが鷗かもめとやもめと違ちがっているところなるべし。

○又かり金は華陽国志くわはようこくしのほとゝぎすと同おなじ」ことにて、大坂の中つ腹文七ちゆうばらといふ者もの、魂たましいなり。それゆへ大勢せいそろくとして渡わたる也。上かたのきおひ故ゆへ、なく声こゑがちとのろし。尾に尺八のさし毛ありて足は塗下駄ぬりかたのやうに黒くろし。

○めんない千鳥は大星ゆらの港みなとにすみ、忠しんくらやみの七ツめへに、てのなる方ほうへくとないて出る。此とりのまねをすることは市川市江が奇妙きみやうに上手じやうずなり。

へめんない千鳥は糸いとの切きれた奴やつをみるようじやわいの。

〔やもめ〕

へ八や、みやな、かりかねだのかきおきだのと、べちやあねへ、あたまのかみをゆつたやうだぜ。ひとをつけにした。

〔めんない千鳥〕

〔かりがね〕

〔六ウー七オ〕



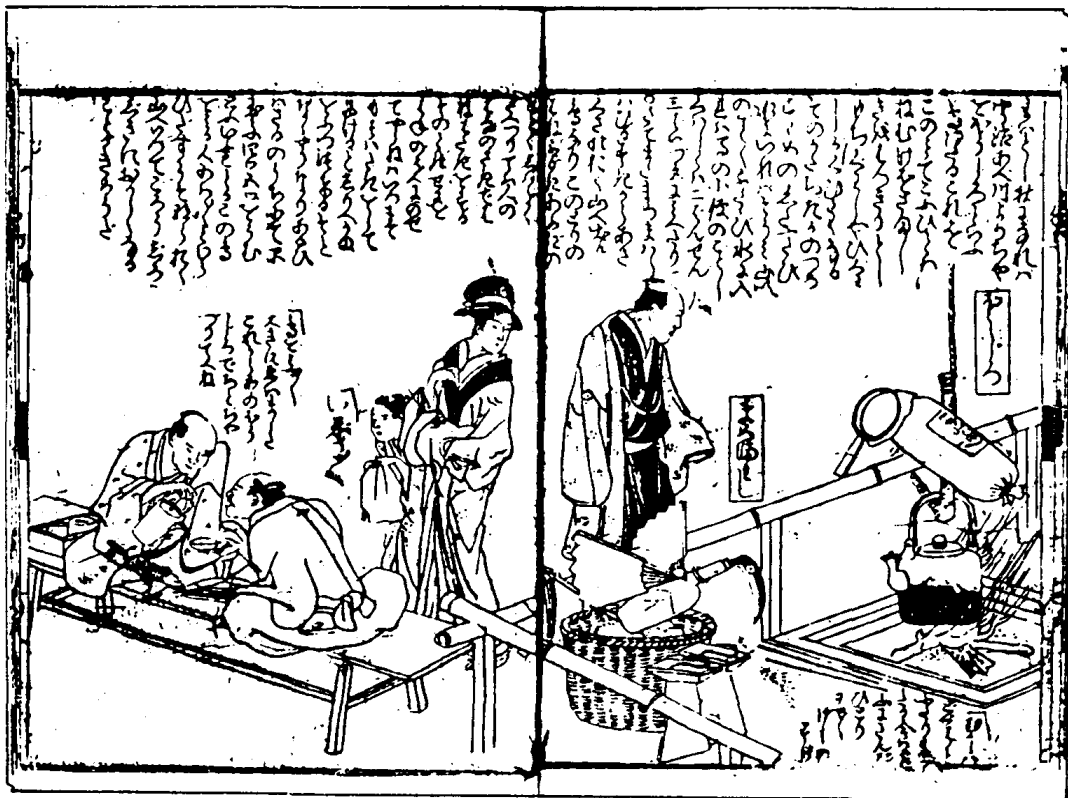
毎年秋になれば宇治あべ川より茶をほうじろといふ鳥がわたる。これを好て買ふ人は眠気をさまし、気をはつきりとし、餅菓子や干菓子が食たくなる。その形たかの爪雀の舌、一度水にあれば総身山吹のごとく、再び水に入れば馬の小便のごとし。詳しくは二ばんせん三ばいづゑに見へたり。

○さてまたまめまはしは昼過から浅草の奥山へ出ル鳥なり。この鳥の羽古き扇の「ごとく、しはらくさへづりては人の鼻の先で羽はたきをする。その時銭を羽の上のせてやらねは、いつ迄も羽はたきをして、逃ると尻へ鎌をふつつけるそとなくやうなり。或はざるのうちにて早玉子四ツ五ツをうむといふことか。この鳥をみる人あは、くと笑ひだす。うそなら奥山へいつてごろうじろ。じきにおかしくなることが奇妙だ。

〔ほうじろ〕

〔まめまわし〕

へむかしはどぜうをふたりも出たる。今はお山にたんだひとり、ヲヤ／＼けしのすけ。



へいゑさく。

へ鳥をみなく、大きに酔ました。これからあのほうじろ
でちとちやづりてへね。

〔八ウー九オ〕

こまにさまくあり、唐ごま貝ごまでんくこま、これは冗
談だが、およそこまは樽の如く好で人の手にとまる。この鳥松
井源水によくなじんで、筆の先脇指のきつさきにとまり、或は
梯子上り綱渡り、坐れといへば坐り、動けといへばうごく。ど
ふいふことか他の人のいふことは聞ず、源水がいふことばかり
よく聞分る。往還で子どもでのひらへとまる時、わるくする
と外たがり、友たちの額」から血をだすこと度くなり。みな
さんご油断なさるか。

○又まひぢばりといふ鳥は、口と尻から煙をだし、をりく灰
吹を叩くこと木つ、きの如し。親父が息子に意見をするときは
此鳥をもつて畳を叩き、おいらんがじれさつしやるときも此鳥
をもつて背中をくらわせさつしやる。近年彫に山東といふ銘の

〔八ウー九オ〕



ある鳥がはやりなり。作者もこの鳥が、至て好にて片時も手ではなすことなし。しかし書物なぞに屈託したときはこの鳥のお蔭で着物、膝へ穴をあけられ、か、あ左衛門の小言をきくことたびくなり。

へこまは言葉に従つて回る。ナント上手でござりませう。

〔こま鳥〕

〔まひぢばり〕

わたくしかたの地ばりといつば、りぶんはひばり骨のごとく細く仕り、金の鍛はひばりたかのごとく鋭けれども、まひひばりのごとく高く上らぬやうに工夫いたし、ひばりけのこまもの問屋などの代物と違い、至て丈夫な地張でござります。きせるたばこ入御用なら、此間におもとめなさい、なるく山東でござい。

〔作者馬琴内〕

兄弟ぶん京伝見せの義相かはらず御ひいきねがひ上ます。その代りに草双紙は京でん作より私作を御評判下されませへ。ナント欲気はみぢんもごんすめへ。

〔九ウー十オ〕

かけとりは五せつく大みそかの夜飛歩くとりなり。頭は矢立の如く腹は提灯の蛇腹に似て光あり。故この鳥に舞込れるときは、ゆきまわつてきさつせへといふ。これまじないなり。この鳥内ばらいてはならの木にとまるときはとつさりとしりが坐り、取て行ふくとなく。その時おはらいをだして見せれば和藤内に出あいし虎よりも自由になること奇妙なり。

○又大ふく鳥といふとりは商人の家にて大切にせねばならぬ鳥なり。もし此鳥とんでゆけばしん」だいは暗闇となる。

この鳥高利をむさほらす、よく稼ぐ人の家には五十年も百年も
 放し飼になつてゐる。毎月みそか十四日前にはかけとてこふ
 くときさへづる。その家の主人や番頭さんによくなじんで常に
 膝の上にとまつてゐるなり。

〔大福鳥〕

〔かけ鳥〕

「此鳥はいづれもあき人の大切にせねばならぬものだ。た
 しか大ふくてうのひよつ子をばちうもん鳥といふそうだ。

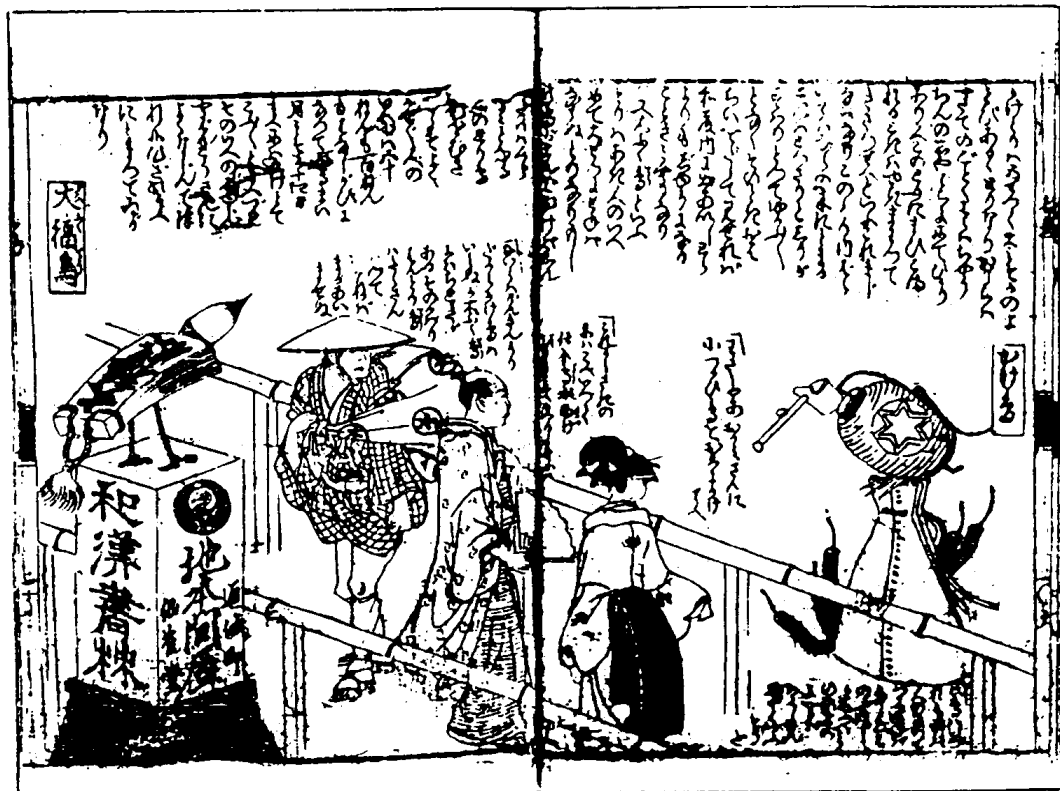
「わたしやおおかみさんに小遣鳥をおめにかけてへ。

「これから先にはこへ行て仕入鳥 水あげ鳥をみてかへ
 りませう。

「おいらは現金売だから、かけ鳥はいらぬが、大ふく鳥に
 はちときがある。そのかはり判取鳥はたくさんかつておかね
 ば間が合ませぬ。

〔地本問屋 通油町 仙雀堂〕

〔和漢書林〕



〔九ウー十オ〕

〔十ウ〕

よたかには四十八たかの内廿四番目にあたるゆへ、廿四もんの比翼の鳥ともいふ。この鳥夜は川端、材木のなどに出ていて、風吹鳥のむく鳥をつらまへる。されど他の鷹と違ひ、ひつつかんで組合ふとき、いつでも夜鷹は下になるとみへたり。しかしさすが鷹のことなれば負はせず、端銭廿四文ひつさらつてつきはなす。此鷹に出あふたる鳥は其当座はどこもつられぬやうなれども、しづうはみほねが痛み、だんく鼻がなくなつてくる。あんずるによたかには人の鼻を餌食にするとみへたり。

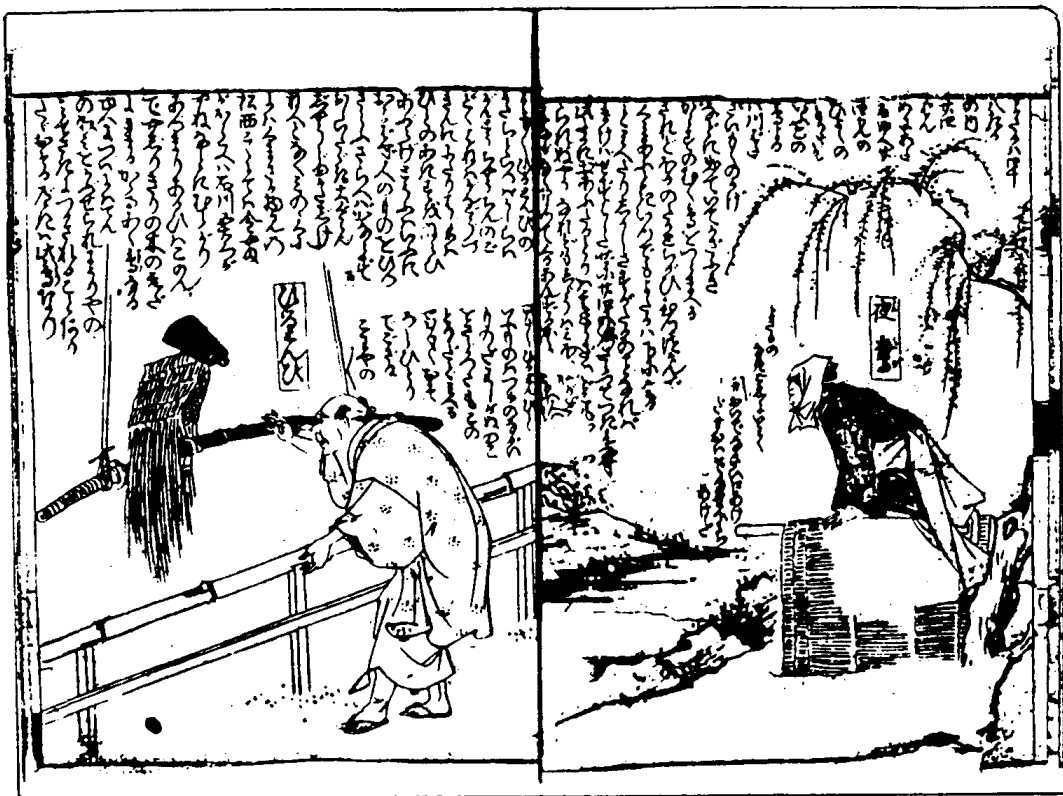
〔夜鷹〕
(よたか)

よたか、なきごゑにいわくへサ おいでなさい、口あけだ、サおいでなせへくちあけだ。

〔十一オ〕

そもく昼とんびの容といつば、頭はがんどう提灯のごとく、羽は強盗頭巾に似たり。初は人の空巢を狙ひ、油揚豆腐はいふにおよばず、人のものをひつさらふ。さらへば必ず押戴

〔十ウ〕 〔十一オ〕



き、大願成就かたじけねへとなく。美濃国には熊坂物見の松、西国にては金山が洞、又は石川五右衛門が屋根などに群り集り、或はこのんで屋尻切の木の枝にとまる。かゝる悪鳥なるゆへに、遂には天の網を被せられ、煮売屋の店先につるされることあり。たゞおそるべきは此鳥なり。

へヤレ／＼ひるとんびというものは爪の長いものだ、わしが布子をさらつたもこの鳥だとみへる。ヤレ／＼／＼おそろしひとりでござる。こわやの／＼。

〔ひるとんび〕

〔十一ウー十二オ〕

かちとりは水鳥にて、波を羽にして内川を遊び歩く。全て水鳥は冬多きものなれども、この梶とりは夏のうち多く出るなり。夏でる奴は腹の内に種／＼むりうの声ありて、或は長唄豊後二てう鼓、又七月になれば川施餓鬼のお経も囀る。この鳥家にて舟かへ／＼となくは雌鳥なり。雌鳥は水へ入らず。

○よしはら雀といふ鳥は頭は継三味線の蛙股の「ごとく、毛色猫の皮に似たり。常に紫檀の木にとまり、又は人の膝の上にゐてなく。そのなく声に曰く、およそ生るを放つこと人王四十四代の帝こうせう天皇の御宇かとよ、やうらう四年のすへの秋宇佐八幡の托宣にて、諸国に始る放生会など、囀る。まだ／＼この末至て長し。詳からずとみんな承知のとゆへこれを略す。こいつは洒落でもなんでもねへやつさ。

かちとりの羽音はぎい引／＼とする。なんのことはねへ、かな佛のへをひるやうなものなり。

へ茶舟よりにたりよりのんだりよつたりがたのしみだ。こゝが船頭人殺ずの場でもあろう。

〔かぢ鳥〕

へなかくよくさへづるはへ、寒声かみこへを使つかつて始終しじう声こゑをふつきつたら、よくなりましやう。

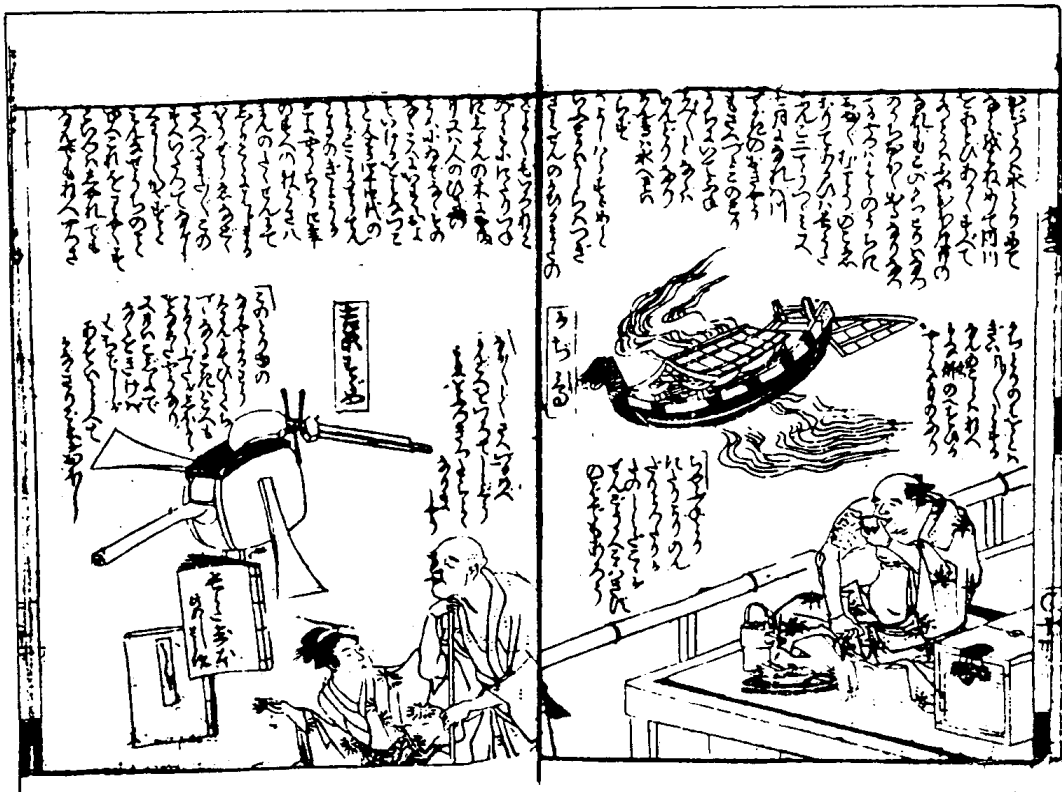
〔吉原すゞめ〕

へこの鳥湯とりゆのなかや夜往還よるわうくわんにて、一口ひとくちづ、なくときは声こゑも悪わるく、豚ぶたがしほからをなめたやうなり。又稽古けいこ所じよでなくを聞きば、觜くちばしが青あをいとみへて、金切声かなきりこゑが多おほし。

〔十二ウー十三オ〕

せうくじんきよは至いたつて雌鳥めんどりに孝行こうかうな鳥とりにて、妾狂めかけぐるひ囲かこい者ものがすぎの木きづゑにとまるときは、顔かほの色いろが青あほくなり。手足てあし瘦やせこけて腰こしがひよろつき、顎あごで蠅はいを追おふが上手じやうずなり。歩あるくときよいくよいくとなく。故ゆへに人ひとよいくのせうくじんきよと名な付つく。うなぎ玉たまご子こ八味地ちわう黄わうほばしら丸くわんなどをゑじきにするなり。○さて又ひよくの鳥とりの羽はねは緞子どんすの夜着よぎの袖そでのごとく、尾おはしごきの帯おびに似にたり。恋こいの山道雨みちあめとなり雲くもとなる日は「屏風ひやうぶの浦うらあいはれの池いけに首くびつたけ陥はまりこみ、互たがいに死しね死しなうとなく。此こと

〔十一ウー十二オ〕



り明の鳥や鶏は勿論、お寺の鐘つく坊様などはきつい嫌なり。

或は好でうはきの枝にとまり、風吹鳥のやうになつたところを

見すまし、若ひ衆桶伏にて捕へる。世に色鳥といふはこれなり。

〔少く〜じんきよ〕

へあこで蠅を追ふ所が奇妙だ。

へちと地黄をば休で、とら一がたけり丸を摺餌にして食せ

ることだ。そして芝の太一庵の一粒金丹もよかろうによ。

〔ひよくの鳥〕

へなんだかこのごろはおいらんがいつそ浮れさつしやる。

ばからしいぞよう。

へ比翼の鳥のとまる木は枕なり。今も枕に比翼紋を付けるは

このりくつなり。

〔十三ウー一四オ〕

水乞鳥は雨のふりそうな日にでる鳥にて、日和のよい日は影

も形もみせず、常に好でぬかるみをほびき歩き、頭は助六の持

物となり、羽は常磐御前の隠家となり、足は卒塔婆小町の手

〔十二ウー十三オ〕



ひき引となり、足の先は伊久が頭のおきものとなる。全て梅雨五月
 雨雪しぐれの降る時この時この鳥に見放れては遠出もならず、
 夏夕立のときなどは、此鳥至て払底にて濡単ばかり多く、大道
 をかけてゆく。

○くいなは一日に三度づ、なく鳥にて大所にてはその声拍子
 木のごとし。凡そ生とし生るものこの鳥に見はなされてはあが
 つたり大明神の納め鳥にするより他はなし。そのなく声ひよつ
 このうちはまんま食ふくとなき、若鳥はちやづろふくととな
 き、親父鳥はおじやくとなく。又奈良茶屋の店先におけ
 ば、おあんなさいくとなくなり。もし客の帰りがけに、あな
 た御じぶんはいかゞなど、なくときは声ばかりして形をみせず。
 これを街道湯漬の百囀りといふなり。

〔水こい鳥〕

へ女郎かいと夕だちは、えて馴染のないところでふられる
 ものだ。

へ小暮しの家にあるくいなの声は、杓子で飯鉢の縁をた、
 くがごとし。くひなの鳴くをた、くといふもこれよりはじま



る。

へけさのお飯の水かげんは奇妙だろふね、ゑんりよなしに
たんとくいな。

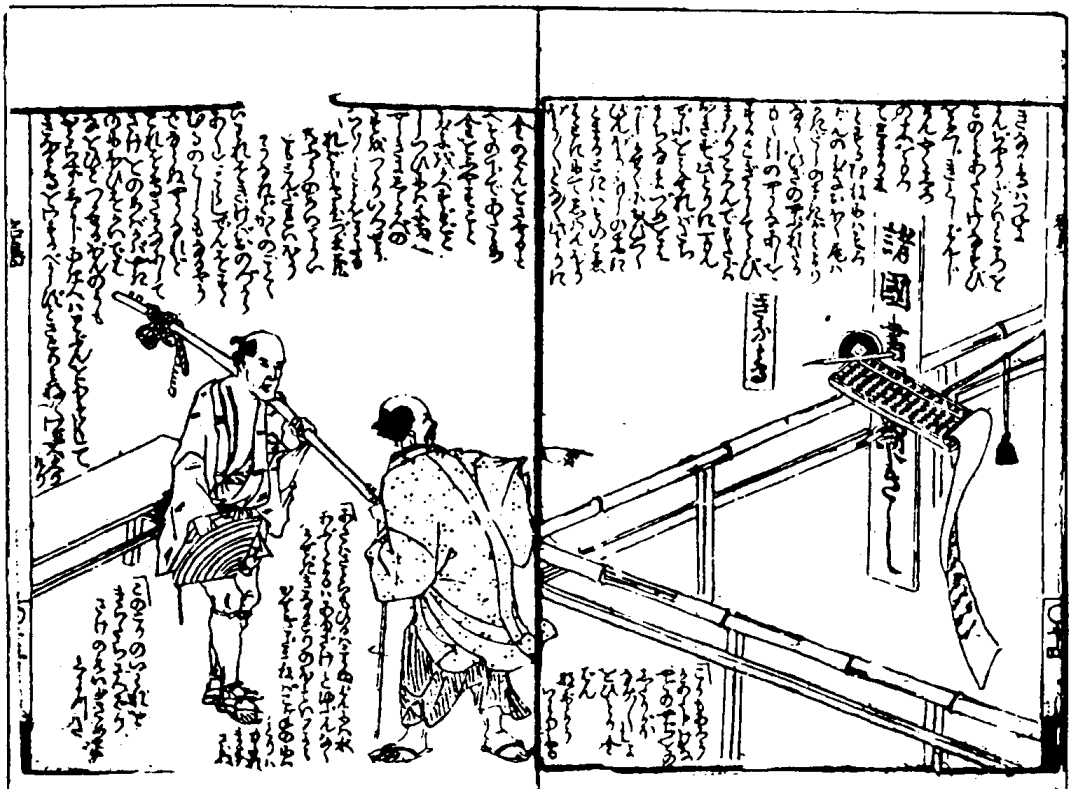
〔喰ひな〕

〔十四ウー十五オ〕

きなな鳥は常に勘定高いところを好み、あたじけなすびを餌
食とし、万事儉約しろの木をもつて止り木とする。胸には算盤
の玉子多く、尾は書出の巻紙よりながく、膝の破れたるも、引
のやうな足を摺子木にして飛回り、ころんでもたゞは起す、此
鳥に一文銭をみせれば忽ち生爪を剥し、稼ぐに迫付く貧乏なし
の木にとまるときは、その声鳩に似て、しはんぼうぼうくと
なく。此鳥に「金の番をさせると、臍の下で温め、金を増すこ
と玉子をかへすがごとし。遂には千両屋敷に白壁の巢をつくり、
一生らくくと世を渡る。

へこれが名鳥屋づる蔵が工夫の名鳥、いづれもとんだ靈宝のや
うなれど、かくのごとく謂を聞ば自ら悪を懲し善を勧るのはし

〔十四ウー十五オ〕



ともなるやうでならぬやうなれど、それを鳥さかなにして酒を
 飲ば、蒲焼のほひをかいで鼻をひこつかせる煩惱も起す、諸
 事商人は利分を細くしてきななか鳥を忘るべからずと悟り、みな
 我家へかへりけり。

〔きななか鳥〕

へこうもあるうか、あたじけな のやじをのしたり顔なが
 くしよをひとり金ばん
 なによう言つしやる。

へ朝は里芋、昼はとうふ、晩には水油、夜は甘酒と油断な
 く稼ぎ、きなかどりの細い利から稼ぎださねば、金の鶏は持
 たれませぬ。

へこのとりのいわれを聞たら、さつぱり酒の酔が醒てしま
 った。

〔十五ウ〕

右に述たるおもむきは、詩経綿蛮の篇にもとづき、めんばん
 たる黄鳥丘陽にとゞまる、人としてとゞまるところを〔しら〕知

〔十五ウ〕



ざれば鳥獸とりけものにもしるや、猿雉さるまじにわとり、鷓鴣めじろ、勸学院くはんくわくいんの雀蒙求すゞめもうぎうをさへづり、古今集こきんしゅうの鶯うぐひす和哥わがを詠えいず。烏からすにとんぼのずいかへり。鳩ほとにさんちやの札まよへふみも迷まよば羽はねなき鳥とりを恨うらみ、悟さとれば上うへみぬ鷺わしよりやすし。鳶とびとん飛とで天てんに至いたり、遊あそび過すれば落おちるが慣ならひ、みなさんさよじやないかいな。それ名鳥ななとりは木きを選えらみ、版元はんもとは作さくを選えらむ。これで去年きよねんのとりの作さく、あけて今年ことしのいぬの春はる、とりに縁えんあるつやが新板しんばん、かわらぬ作者さくしやの評判ひやうばんく。

へなんだかしらねへが、草双紙くさそうしの終しまいになると、しきりにめでたくなつてくる。ウ、なるほどめでたしく。
へ此ことうぐへまで札かたをつけたは作者さくしやが半丁はんてうのおまけなり。はんでうのおまけむねちかはどうでござへす。

〔あふらとり〕

〔俳諧節用抄自稿〕

曲亭馬琴作

しじうからりやうけんねんだいき
初老了簡年題記

(二オ)

史書春秋者古之年代記也 月令歲時記者古之大雜書也 明ノ
時冬至後ノ諺ニ云ク一九二九相逢テ不出レ手ヲ 三九二十七籬
頭吹ク鷺栗一ヲ 四九三十六夜眠如ニ露宿ノ 五九四十五太一陽開
二門戸一ヲ 六九五十四貧兒爭ニ意氣一ヲ 七九六十三布納擔ニ頭擔
一 八九七十二猫犬尋ニ陰地一ヲ 九九八十一犁耙一齊出ツ 以
レ是ヲ觀レレハ之則和漢人情無レ異ナル也 予以ニ筆墨ヲ遊戲スル者
有レ年 而ノ謔談弄言終ニ老タリ矣 乃チ採テ彼ヲ為レ表ト 摘テ此
ヲ為レ裏ト 遂ニ発ニ數張ノ新研一ヲ以著ニ四十上了簡年題記一 蓋シ
惟ハ千古ニ如シ夢ノ 一歳却テ為レ長シト 蝸一蟬ノ不レ知ニ春冬一ヲ
槿花ノ不レ遇ニ夕陽一 又何ソ足レ怪ムニ矣

享和壬戌年正月

曲亭馬琴撰

(二オ)



史書春秋者古之年代記也月令歲時記者古之大雜書也明時冬至後諺云一九二九相逢不出手三九二十七籬頭吹鷺栗四九三十六夜眠如露宿五九四十五太陽開門戸六九五十四貧兒爭意氣七九六十三布納擔頭擔八九七十二猫犬尋陰地九九八十一犁耙一齊出以是觀之則和漢人情無異也予以筆墨遊戲者有年而謔談弄言終老矣乃採彼為表摘此為裏遂發數張新研以著四十上了簡年題記蓋惟千古如夢一歳却為長蝸蟬不知春冬槿花不遇夕陽又何足怪矣

享和壬戌年正月

曲亭馬琴撰



(二ウー二オ)

了簡年題記

御慶 上春 門松の木 ㊦ 正月九日

八百八町一夜のうちに百万本の松竹はゑる。

三河の国より万才きたる。

二 端月 そうばなの金

中の町にておいらんかい道中けんぶつ

大こくまいきたる

三 青陽 ゆきどけの水

女礼ころんでおこうばこかい帳

大凧きれてかたかは町へ落るひゞき雷のごとし。

へヲヤきのどくらしい。

へかみさんの腰が柳で黒い蹴鞠があらはれた、ヤレくあ

ぶねへ。

へあをつきり三ばいでんらい女ぼう如来よいくのお開帳

近うよつてのぞかつしやりませう。

へおかみさんがころばつしやつたなりで正月しまからお開

(二ウー二オ)



帳てうをおが拝みます。ありがてへ。

へ小僧ぞうや、冗談ぜうだんじやアねへ、早くはや起おこしてくりや、膝ひざをすりむいたはい、が、着物きもの、泥どろになつたが痛事いたごとだ、ア、いてへく。

(二ウー三オ)

余寒 仲春 二日きう灸きうの火 〇 二月初午

初午はつごの太鼓たいこにて耳みみのはた大がみなり。総領そうりやうの甚六しんろくあがつておしやうさんより手本てほんを下くださる。

二 中陽 はるさめのしやり土

かき餅もちやけて網あみの目めへ醬油せうゆをふらす。
冬ふゆぼうこう人ひと帰かえる。

三 夾鐘 ひがんの金

六むあみだ詣まいりくたびれて、おあしすりこ木こぎになる。
初桜はつざくらほころびて日ひあしの縫上ぬいあげをとく。

へかきもちを焼やかせちやア埒らちがあかねへが、焼餅やきもちをやかせ

(二ウー三オ)



るとやつたようじやアねへ。

へおしなや、聞つせへ こんたのそばしやア太鼓せへどん
つくくとなるから、よくくどんつくに生れたとみへる。

へいどばたほへと、ちりとりおわか、これじやア裏店の法
度書をみるようだわへ。

へおしなやどんくをた、いて遊ぶ、どんくくは今日
明日ばかり、ナントあたらしいか。

へなんぼあすは国へ帰る身だつても、耳にまで店替をさせ
るとは、あんまりつれねへそ。なんだかしらねへが耳がぐわ
んくといひやす。頭様の鰐口しやアあるめへし、など、お
しな思ひ付をいふやつさ。

(三ウー四オ)

暖気 弥生 汐干のどろ土 ㊦ ㊧三月三日

品川沖を雪駄にてあるく。

宿下りの女中男ひでり。

四ツ目屋にて牛の角、ごときもの出る。

(三ウー四オ)

弥生 品川沖の雪駄
宿下りの女中男ひでり

暖気 三月三日

四ツ目屋にて牛の角、ごときもの出る



秋 三月五日の暮

品川沖の雪駄にてあるく

宿下りの女中男ひでり

四ツ目屋にて牛の角、ごときもの出る



二 竹秋 ひな店の桜の木

としま屋の白酒しろきれて、お嬢せうさんの目めに大水みづいづる。

十軒店じゅっけんへ内裏だいり雛御参向ひなごさんこう。

三 暮春 とりかへの金

三月五日さんがつごの朝あさ 出替かはりの奉公人ほうこうにん 江えあさつきなますを下くださる。

ち、くり合あひにて新所帯持しんせたいもちはやる。

大屋さんおおいやさん女房にようぼう、火事かじ、九尺二間くじゅうせふにまにて請状うけじやう。

へあさはまぐりより向むかふの赤貝あかがひが奇妙きみやうによさそうだわへ。

へけふはたまたまくの男おとこひでりだから、命いのちのせんたくをする

のさ。

へ新道しんみちで犬いぬの糞くそを踏ふんだとちがつて、汐干しほひにかれいをふん

だは心もちのい、もんだ。

へア、そんな地ちくちはおかれい。

へふんだく、みさいな。かれいをふんだ、みさいな。

(四ウー五オ)

薄暑 初夏

木綿針もめんはりの金

④ 四月一日



(四ウー五オ)

四月朔日ぬのこを三枚におろして綿をぬく。

おかみさん物干に於てしらみ狩。

二 仲呂 利のつく金

はつがつほをみて血の出る金を渡す。

関東縞壹分通用。

三 卯月 甘茶の水

釈迦如来毎年誕生、お寺へ散銭をふらす。

八日のあんどう唐辛子とへんく草の花咲く。

女房自筆の短冊を雪陰へ逆に貼る。

へちよつとこの湯文字をみなせへな。茶漬にした飯粒をみるよふに肥つたちいくがたつた四五十びきさ。

へか、あどん針箱の鋏を貸つせへ。布子を三まいにおろして中落は見倒しに売るつもりだ。

へうづき八日の歌を逆にはつておくと、奉公人が蛇を遣ねへまじないだとき。しかしそれにやア卯月八日より三月

五日がよさそうなものだ。

〔五ウ〕

端午 仲夏 のぼりぐいの木 へ五月五日

柏餅出きかねて隣のかみさんへ加勢を請う。

吹流しの鯉棹のさきへのぼる。

二 麦秋 田植の土

天水桶のぼうふり、蚊となつてなく声われ鐘のごとし。

二丁町曾我祭。

さみだれの夜着かびて、襟先へ白き星出る。

へそれ見なせへ、小さく造るところがみそでござへす。

へわつちらはふだん内の人と柏餅にばかりねるから珍し

くもござりやせん。

(六オ)

土用 大暑 蚊いぶしの火 ⑥ へ六月中旬

両こく川へ花火をあぐるひゞき流星のごとし。

夫婦ねそびれて四十七ひき蚤の仇討。

二 季夏 ふるまい水

雲のみねくずれて大汗をながす。

夕立の往還ぬれねずみ出る。かたち米俵のごとし。

④ へゆふだちの菰つかぶりがいざりでなくつてもつたものだ、

にげろく。

(五ウ) (六オ)



へこう濡ねずみになつたから、せめて大黒傘にでもありつきてへもんだ。

〔六ウー七オ〕

牽牛 初秋 冷素麵の水 へ七月十六日

六日の夜屋根の上に竹生て五色の花さく。
宿下りの子僧はじめて鉄砲放す。一てうにしてやむ。

二 夷則 燈籠の火

草市くずれて町内へ芥の山をつく。
精 壺棚へうりなすびのごとき牛馬出る。

三 文月 おふくろの臍くり金

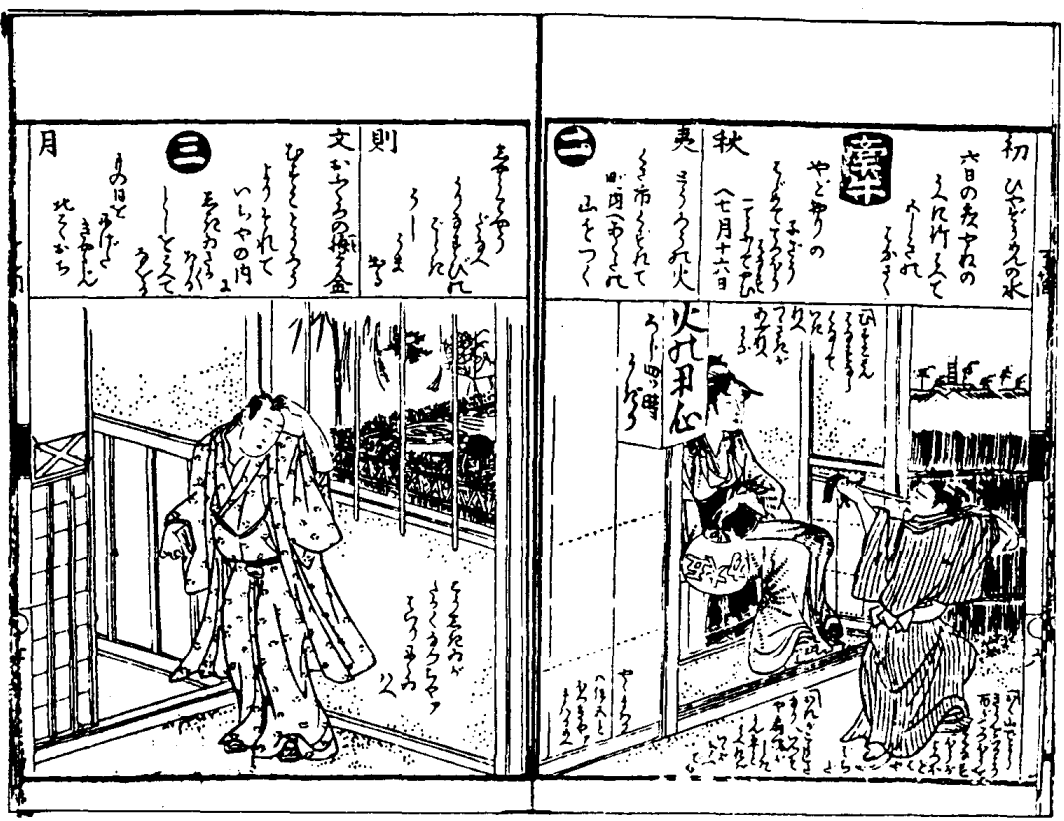
むすこ燈籠よりそれて、一夜の内に敷居高くなる。年を越て直る。

もの日をにげた客人北国落。

へむすこさん、放すなら放していきねへ、筒先があぶねへわな。

へおく山で揚弓をいるより百が鉄砲をはなす方が余程早道

〔六ウー七オ〕



だ。

へおれがこうしたなりは日外扇蝶がした勘平とみへれば
い、が、どふでも役回りは伊五とほつきやアまはるめへ。

〔火の用心　ろじ四ツ時かぎり〕
へこう敷居が高くなつちやア入りにくるわへ。

(七ウー八オ)

名月　竹春　台の物、杉の木　へ八月十五日

八朔の仲の町、白無垢の雪をふらす。

翌日丸めて質屋へこかす。

客人をだんごにして月見をくはせる。

二　仲秋　へちまの水　⑧

てさくの里芋かしら二ツある子をうむ。

むさしのへ薄売きたる。

三　南呂　にはかのおき土

造化の立田姫の山の錦を織出す。

ときわの国より雁鴨きたる。

(七ウー八オ)



へいいわな、みそかまでにやアどうともするから、やかましいことを言わずと早く帰らつせい、やかましいぞよ。
へ凌ぎ筭七本ヅ、くるんで五両一分の損料ならお貸し申やせう。おめへさんのことだから、八朔も間に合てあげま
しさのさ。

へ訳せへ良くしておきなされば又どうとも致しやすけれど、どうも先度のよつなことじやア、へ、へ、へ。
へことしも芋は大当りだ。なんでも屁はひりしだいといふものだはへ。
へぼうや、うなされるなよ。ヲ、いものこく。

〔八ウー九オ〕

重陽 菊秋 菊畑の土 へ九月九日

九日のめし鉢、杓子にて栗を掘る。

うらがれのおいらん無心攻め。

むすこ落城。

二 晩秋 みづ、ばなの水

真裸そこう院ぬのこ建立

いれかへの相談破て七ツやの番頭利息ぜめ。

時雨 孟冬 てあぶりの火 ① へ十月二十日

多びす講のやきもの千両に値がなる。

お命講の持仏造り花をふらす。

ばあさんいぢけて炬燵やぐらと首引。

〔布子こん立〕

へまつばだかそうこういんでんとくじへおさまります布子の建立、さあむいだんぶつさむいだく。

へおんはだかばかつらのべらぼう はらへつたりそはか。

へ光陰の矢先ははやき」八ヶ月、うけつながしつ、ながし

つうけつ、味方の質草いれかへく、万八でも鉄砲でも、五

分でも引かぬ某は、番頭一の古強者、天の時には百に四文の

利にしかず、といふことまで知っているのだ。

へこたつやぐらと首つびきをして、勝つと直に眠くなるや

つさ。

へちとのぼせたはへ。

〔九ウー十オ〕

甚寒 仲冬 おひ代の金 へ十一月十五日

〔八ウー九オ〕



おぼうさん氏神まいり。

腰こしから下四尺あまりのおちやつびる、肩車かたぐるまにて来ル。

二 天正 まくあきの拍子木 ⑤

三芝居にて正月をいふ。

みかんの皮かわ二三尺の羽はねはへて、切りおとしをとびありく。

節季 歳暮 とうみやうの火 へ十二月十三日

す、はきのくろんぼう銭湯せんとうへきたる。

十七日の浅草 人の山をつく。

ゑんぎの小判百両を小せん八文にかゆる。

へごろうじませ、嬢様せうさまのひるきの喜代太郎とをが通ります。

へあの奴やつこは丈五郎とやらだとさ。

へお祝いわひをしまつたら、芝居しばいをみせませう。

へもし太夫さん、あとからも岩井いわいがまいります。

へあとから扇蝶せんてつがくるから、おいらは先さきへ銭湯せんとうに入はいるのだ。

なんだか知しらねへが、十一月から煤掃すすはきをするとは、とんだきまぐれだ。

〔九ウー十オ〕



〔十ウ〕

二 大呂 へつつい直しの土

かしあげのしほ引きを詮索して腹へしんしをはる。
引きずりもち来りて裏店へ白水をながす。

三 除夜 さかやきの水

払ひなしのおやぶん 掛取と大ぜりあひ。
節季候変じて厄払となる。

九九まちがつて大神楽のし、十二文ときわまる。

へしほ引きのあらひはりまでするとは器用なかみさんだ。

あれじやアちりめんぎこの裁縫もできるだろう。

へもちはひきづりをついても、わつちらはけへぐしい亭

主がすきさ。

〔十一オ〕

〔全体総雑書 是より末は裏刷也〕

⓪

○うけむけを知る事

一 木性のふねしほさき、うけに入る。

〔十ウ〕〔十一オ〕



一 火性のもぐさ鳴八ヶ月元利勘定して、うけに入る。

一 土水性のあしの皮十一月十二月ごろあがりにて、むけに入る。

一 金性の包紙あらためるとき、むけに入る。

へ ふうふ二人ふとんの上うへにふんぞつてねればふくれるふんどしの蚤のみ

へ おいらは質屋しちやの奉公ほうこうをしてゐるかはり一年中わんちゅううけたりむけたりだ。

へ 利息りそくに追付おいつく貧乏びんぼうなし、一文無もんなしがあきれらア。

へ もふくどきなさつても、今度こんどは一分はつきやせん、ほんのことさ。

〔十一ウー十二オ〕

男女相生の事

大吉 男すりこぎの木 女すりばちの土

半吉 男たどんの火 女こたつやぐらの木

大凶 男ちの出る金 女そらなみだの水

未吉 男としよりのひや水 女水あげの水

〔十一ウー十二オ〕



半吉 男またぐらの火 女ぎやうずいの水

凶 男てつほうの火 女鳴のさいふの金

凶 男つちけいろの土 女しらかべの土

半吉 男つかひすてた死ニ金 女すい付たばこの火

凶 男利のつく金 女身あかりの金

未吉 男ゑいぎめの水 女やきもちの火

吉 男みのあぶらの水 女ほまちの金

へとかく人はやぼて律義でかせがねば、金はもたれもうさぬ。

へちと二三丁はやいが、めでたいくア、めでたい。

へ身の油の水性をしぼつて貯たほまちの金性だから、みになるはづでござんす。

へきやくはまたぐらの火性だから、だんく熱くなります所が奇妙でござい。

へなんだ、行水だ。水風呂桶でこぼうがあきれらあ。

へおがみひす、よしでもおくんなんし、ぎやうずいでおつす。

〔十二ウー十三オ〕

口も八町神くりよう

此繰様はその年の干支にもなんにもかまわず勝手次第に繰るべし。

かいざい 此方にむかひてあきなひはしめ、張めんをけしてよ
し。

かんどうぶん 三年ふさがり。

大おん つんぼの方にむかひて人をよびてよし。

さいぎやう むかひてかたをよみ、ふじの山をみてよし。

さいはい むかひてす、はき、ちりをとりてよし。

さいそく むかひて金をかりず。

わうごん よろつよし。

ほうひ むかひてへをひらず。

〔さいぎやう〕さいけうのだぐち

〔かいざい〕大ざいのこじつけ

〔さいそく〕さいせつのおつかふせ

〔大おん〕たいをんのいけどり

〔さいはい〕さいはのせつなざいく

〔わうごん〕わうばんのまちがひ

〔かんどふぶん〕大せうぐんのこじつけ

〔ほうひ〕ひやうひのくちあい

〔十二ウー十三オ〕



〔十三ウー十四オ〕

三国一笑女都僧年数

ばかによらい 百の口十六年ぬけ

たるが大じ 年季九十年

せうとく大しゆ 一生五十年

娼妓ぼさつ くがい十年

女ぼう大じ こなた百年わしや九十九年

くらがへざんせう坊 二十七年

びんしやん上人 十六年

ろこうぼうし 三代六十年

しやつ橋和尚 し、十六年

百いんてんじや 正風百余年

かんどう僧都 百年め

かせぎ和尚 長いき八十八年

へこうしたなりは酒樽の幽霊といふものだ。立岱がみたら
じきにかくことだろう。

〔せうとく大酒〕 へのめばうまやどの王子のちにせうとく大

〔十三ウー十四オ〕



しゆと申たてまつり、せたいぶつほうはらねぶつをはじめ
給ふ。

〔たるが大じ〕 へ九ねんとんちき十年一両のたるが大じ。

〔娼妓ぼさつ〕 へしよくわいうら三くわいめ四くわい五くわ
いをたもち給ふせうぎぼさつ。

(横に書いてある部分)

此かねざし八寸を 中よりまつぶたつに折返ばすなはち八寸
どうがへしとなる。これにておどぐの寸法をきはむべし。

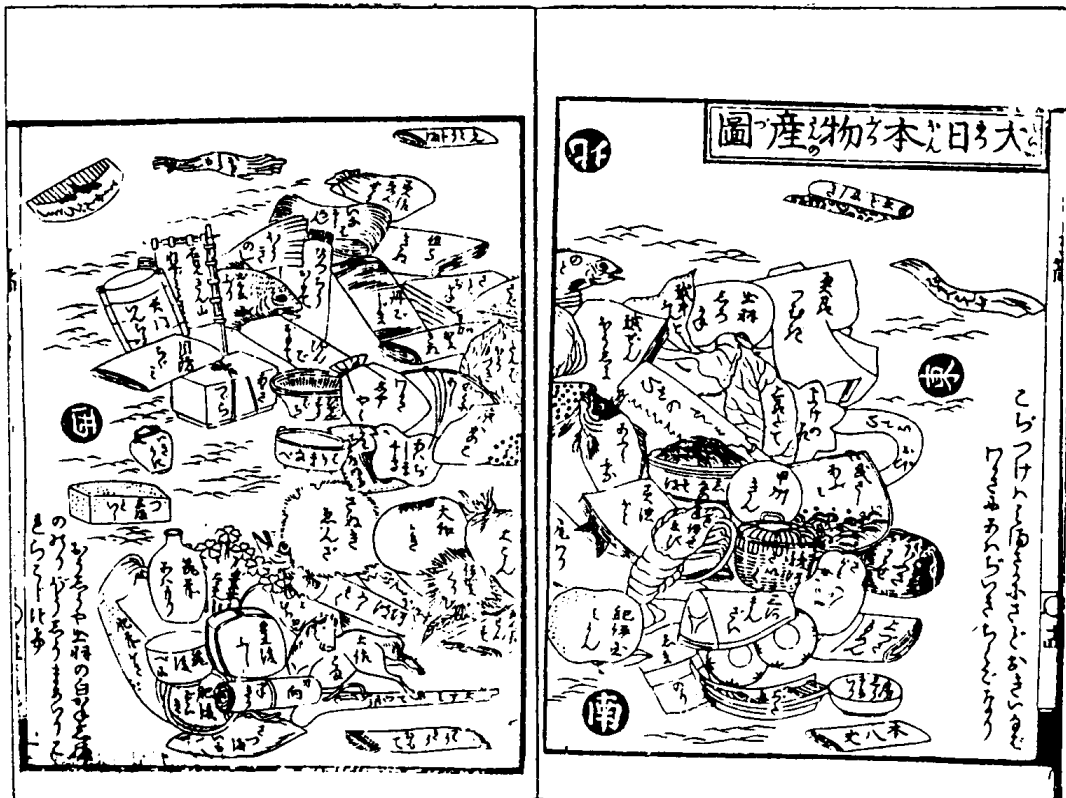
〔十四ウー十五オ〕

大日本物産図

こぢつけは美作に佐渡隠岐因幡若狭に淡路壹岐筑後なり

奥州や出羽の白かね志摩の海苔防州まめいりこれらこじつけ

〔十四ウー十五オ〕



〔十五ウ〕

流俗富貴令

馬琴作
長喜画

これははじめ一枚刷の趣向にて、てんごう調宝記と申す
目録出しをき候ところ、版元のこのみにつき、こじつけな
がら草双紙にて御めにかへ申候。
いつもの通り、めでたしく。

〔十五ウ〕

